

# 鉱山跡地の風景論

川 崎 茂

## まえがき

鉱山集落 (mining settlement) は、人間が地上に刻印した特異な文化景観 (Kulturlandschaft) である。それは J. Brunhes の指摘をまつまでもなく、地下における採鉱活動の結果 (suite) であり、またその標示 (marque)<sup>1)</sup> である。それだけに地下の採鉱活動そのものが、地上の鉱山集落の心象風景をも形成してきた。しかもそれはテントタウン、ブームタウン、ゴーストタウンといった集落のライフサイクルを最も端的に示すものとしてイメージされてきた。

筆者は、1950年代以来、かかる鉱山集落に若干の関心を寄せ、『日本の鉱山集落』や『鉱山業フロンティアの諸相 — 環太平洋地域論 —』などの著作をも公刊してきた。かかる研究過程の中で、たえず筆者の脳裏に横たわっていたものは、鉱山の閉山後の問題であった。

周知のごとく、日本列島においては1950年代後半以降とくに炭鉱の閉山が相次ぎ、また1970年代以降には主要な金属鉱山の閉山が目立った。まさに日本列島の地下資源開発は断末魔の様相を呈してきた。しかし、日本の鉱山の果たしてきた役割、全国各地に残した鉱山の爪痕は簡単に消え失せるものではない。国土の環境保全、地域振興などの面からも旧鉱山地、鉱山跡地に対する一層の着目を必要とするであろう。

かかる視点に立ち、筆者はあらためて1992年から1993年にかけて全国各地の鉱山跡を集中的に踏査し、閉山後の様相を観察した。本稿はその観察内容などをもとに、鉱山跡地の風景を概括的にまとめた覚書である。<sup>3)</sup>

## I. 歴史的鉱山地遺跡と文化財

鉱山と鉱山集落の遺跡は重要な産業遺跡である。わが国では、1960年代後半に入り、佐渡金山と石見銀山の鉱山関係遺跡が国史跡に指定され、鉱山遺跡の保護、活用の問題が大きくクローズアップされてきた。

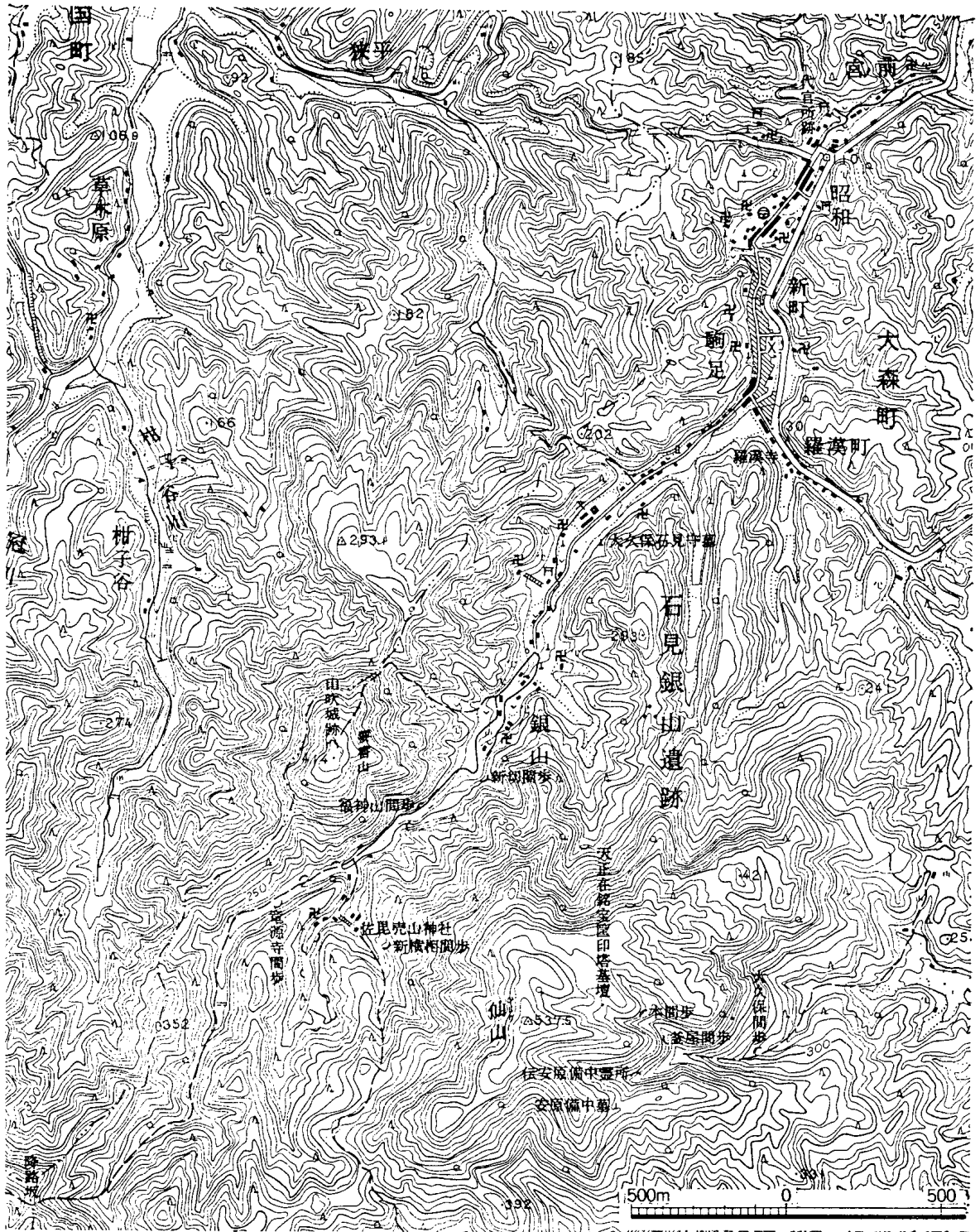
〈「佐渡金山遺跡」〉 佐渡の相川は近世期幕府直轄の典型的な臨海鉱山町であった。海岸南部の下戸から北東方の町中心部を遠望すると、みごとな海岸段

丘と、その背後に顔を出す「道遊の割戸」の風景がとくに目につくであろう（写真1）。この「道遊の割戸」（写真2）は頂上から真二つに割れた、17世紀金山開発初期の露頭採掘跡で、文字通り佐渡金山のシンボルであった。この「道遊の割戸」をはじめ、宗太夫坑（写真3）、南沢疏水坑、佐渡奉行所跡、御料局佐渡支庁跡、大安寺境内の大久保長安逆修塔、河村彦左衛門五輪塔などが、いわゆる「佐渡金山遺跡」として、1967年に国史跡の指定をうけた。「道遊の割戸」など採鉱地に連なる相川の海岸段丘面には、佐渡奉行所跡や、京町などの古い町並み、多くの寺院群、由緒ある集落跡などが分布した。かかる段丘面は、まさに近世鉱山町の遺跡、遺構の宝庫であった。

佐渡金山は明治期に入り、「道遊の割戸」周辺で大立坑と高任坑（道遊坑）の両堅坑が開鑿され、鉱山の近代化が進められた。1896年以降は御料局から払下げをうけた三菱資本が開発を推進したが、戦後の1952年には閉山に近い大縮小を余儀なくされた。その後も「道遊の割戸」の麓に事務所を置く三菱金属鉱業佐渡金山として、なんとか命脈を保ってきた。ところで、「道遊の割戸」付近一帯には古い坑道の狸穴が無数分布したが、なかでも宗太夫坑は近世期の代表的な大斜坑であった。そこで宗太夫坑が国史跡に指定されるやその一部を公開して、佐渡観光の一翼を担うべく登場したのが1970年開業の(株)ゴールデン佐渡であった。この観光施設は、宗太夫坑を見学して出ると金山展示室に通じ、その階下に売店、食堂なども備わっている。この施設背後には「道遊の割戸」の異様な風景が広がり、この濁川水系奥地には大立坑などの鉱山遺構が連なっている。

〈「石見銀山遺跡」〉 島根県大田市大森町の鉱山関係遺跡14ヶ所が、「石見銀山遺跡」として国史跡に指定されたのは、佐渡のそれに遅れること2年の1969年であった。ちなみに、1975年測量の2万5千分の1地形図「仁万」（にま）図幅（第1図）には「石見銀山遺跡」と記載され、国史跡に指定された銀山間歩7ヶ所（写真4）、信仰遺跡5ヶ所、山吹城跡、代官所跡（写真5）など計14ヶ所の分布が示されている。また島根県教育委員会も1974年と1975年に石見銀山御料大森町年寄遺宅熊谷家ほか7件を県史跡に指定するなど、鉱山関係文化財の保護、活用に積極的に取り組んできた。地元の大田市教育委員会も1983年度からまず4ヶ年計画で石見銀山遺跡総合整備計画策定事業を進め、蔵泉寺口番所推定跡地や代官所南地区などの発掘調査を実施した。その後も市教委は埋蔵文化財保護<sup>4)</sup>の立場から発掘調査を広げてきた。

さらに注目すべきは、大森地区（写真6）と銀山地区（写真7）の町並みが1987年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されていることである。大森地区では、かつて代官所を中心に武家、豪商、郷宿、町人などの屋敷が並び、神社



第1図「石見銀山遺跡」の分布

(2.5万分の1地形図「仁万」図幅, 1975年測量)

や仏閣なども分布した旧山陰街道沿いの町場約1kmがその保存地区指定の対象となった。さらに銀山地区のそれは、旧蔵泉寺口番所から新切間歩跡付近に至る約1.8kmの山内町並み跡であった。

このように1969年の国史跡「石見銀山遺跡」の指定を契機に、石見銀山地において、鉱山地関係の遺跡、遺物、遺構、町並みなどの文化財指定や、それらの調査、整備、保護、公開活用などの一連の動きが活発化してきた。このことは全国的にみてきわめて注目すべきことであった。鉱山史跡観光などの面を通じての文化財の公開活用は、広域的な佐渡観光の一翼を担う佐渡金山観光には遠く及んでいない。しかし、国史跡の代官所跡や旧間歩などを中心に整備、活用が進められ、年間来訪者も十数万人を数えるまでに至っている。とくに銀山地区奥部にある国史跡の龍源寺間歩が1989年7月に整備され、その坑道内の通り抜けが一般に公開されるに及んだ。これはただ短い古い坑道を通り抜けるだけの坑道観光であったが、代官所跡界限とともに、銀山史跡観光の目玉となった。筆者は1991年10月にこの龍源寺間歩を通り抜けてみたが、その出口付近で「そば処」の幟を立てる妙像寺の風景に接して驚いた。この法華宗妙像寺は、筆者が卒論で最初に訪れた1953年当時、集落の衰退著しい銀山上地区にあって唯一の残存寺院であったが、すでに無住寺院同然の状態にあった。

この石見銀山地の場合、1887年以降藤田組によって近代化が進められ、とくに近世銀山町域外の旧大田村柑子谷こうじだにに永久通洞坑口が開かれた。この通洞坑口付近に近代的な企業集落が形成されたが、1923年には早くも休山に追い込まれ、そのforeignな集落は急速に消滅し荒廃地と化した。これに対し、nativeな近世銀山町域の銀山地区は、典型的な衰退集落の様相を呈しながらも、1955年に大田市に合併吸収されるまでは、にま邇摩郡大森町の一つの大字「銀山」（銀山上、銀山下）として存続維持されてきた。この大字「銀山」は、『銀山旧記』に「家数貳万六千軒余、寺百ヶ寺」などとまで江戸初期の繁栄が誇大的に伝承されている近世銀山町域である。石高4.8万石、150ヶ村に及ぶ銀山領の中心地であった大森地区とともに、その歴史的地域自体が石見銀山地の遺跡、遺構そのものといって過言でない。大田市は銀山地区などに環境保全地域の指定地区を設けているが、自然保護とともに、地域の歴史的環境の保全、保護が大切であることはいうまでもない。

〈生野の鉱山遺跡〉 但馬の生野銀山は、佐渡や石見の両金銀山とともに、近世期日本の代表的な幕領金銀山であった。しかるに佐渡や石見の金銀山町域のように、国史跡の指定をうけた鉱山関係遺跡は1993年現在みられず、また鉱山関係遺跡の本格的な調査なども進んでいない状況である。



生野銀山町域は、石見銀山町域とともに筆者の卒論のフィールドで、はじめて訪れたのも1953年であった。生野の場合、佐渡相川同様に1896年以降三菱資本によって近代化が進められ、石見銀山域とは対照的に近世銀山地域内に三菱の企業集落を形成して、1973年の閉山まで鉱山開発が存続した。近世の「銀山廻」7ヶ町の中で、口筋と奥筋の集落間にあった猪野々は、明治に入り真先きに官営基地に変容し、全国的に注目された。その後、この猪野々は御料局時代を経て三菱の鉱山本拠地として君臨したが、閉山後も産業機械部門の生野製作所などをはじめ企業立地の拠点となった。その対岸の市川左岸には、かつて病院や協和会館ほか鉱山の厚生福祉諸施設が分布していたが、その跡地に日本シリコンの誘致企業が進出し、それに隣接する山神社境内は駐車場の観を呈している。

ここで注目すべきは、採鉱の主力があった金香瀬鉱区の通洞坑口付近の鉱山跡地である。ここには1974年開業の(株)シルバー生野による「史跡生野銀山」として資料館や鉱物館などの諸施設が設置された(写真8・9)。とくに旧坑道の一部を利用した坑道観光が、鉱山観光の目玉となっている。またこの金香瀬坑口(写真10)の上部奥地には、銀山開発当初の露頭採掘跡や旧坑跡を見学するコースが設けられており興味深い。ここでみる慶寿鍾ひ(写真11)のごときは、佐渡の「道遊の割戸」に当たる露頭採掘跡で、生野町の文化財に指定されている。国や県による鉱山遺跡の文化財指定は未だみられないものの、今後調査を深化拡大し、文化財指定を強力に推進することによって、鉱山遺跡の保護、活用をはかるべきであろう。

生野町は1973年の閉山によって人口減少をみたとはいえ、「銀山廻」7ヶ町の近世銀山町域が、今日も朝来郡生野町あさこの主要部をなし、石見銀山町域の今日とは対照的である。鉱山に代わって自治体を支える企業の誘致に関心が集中し、鉱山遺跡の保護、活用といった側面は、金香瀬坑口付近に限定されている状況である。

〈院内の鉱山遺跡〉 出羽の院内銀山地は、石見銀山地同様に明治以後近世銀山町域外に官営ならびに古河資本による近代集落域が形成され、近代化が進められた。しかし、早くも1920年に採掘中止を余儀なくされ、旧十分の一番所内の近世銀山町域も事実上無住地と化していった。この院内銀山は江戸初期の『梅津政景日記』などでも著名であるが、元和期には1万人程度の人口が推定され、「領内の上方」と称されるまでの繁栄を示した秋田藩の大銀山であった。しかるに今日はゴーストタウンと化しているが、秋田県は1973年に御幸坑(写真12)、金山神社(写真13・15)、早房坑などを「旧院内銀山跡」として県の文化

財に指定している。ちなみに、御幸坑は1881年に明治天皇が5番坑に入坑されたのを記念して、行幸50周年の1931年に5番坑を御幸坑と改称したもので、1933年には文部省指定史跡となっている。

1976年には「院内銀山史跡保存顕彰会」が発足し、この顕彰会と秋田県、雄勝町の3者が一体となって、1977年には「史跡公園」として銀山跡の整備に乗り出している。そして前記顕彰会を中心に毎年9月21日に「銀山まつり」が開催され、金山神社の神事、三番共葬墓地（写真14）の供養祭、銀山おどりの伝承奉納などがみられている。1980年9月21日には明治天皇臨幸100周年行事が催され、臨席の高松宮も金山神社に参拝され、銀山おどりを観覧された。地元の雄勝町自身も1984年には慶長期創建の正楽寺跡、西光寺跡などを町の文化財に指定するなど、銀山関係遺跡の保護、整備に努めているが、石見銀山地のそれにはほど遠い状況である。院内銀山関係の資料展示施設である洋風の「院内銀山異人館」にしても、JR院内駅と併設されたかたちで1989年にオープンしており、旧銀山町域とは4km以上も隔たっている。

〈山ヶ野の鉱山遺跡〉 島津藩の山ヶ野金山は1640年に佐渡金山と並ぶ大金山として登場し、1659年ごろの最盛期には山ヶ野33町、永野10町の鉱山町を形成し、人口も約1.2万人を数えた『金山万覚』などに伝承されている。明治以降も島津家によって近代化が意図されたが、島津家との因襲的な関係において、自稼請負が大正末期ごろまで存続し、自稼の水車風景が山ヶ野の集落景観を特色づけた。山ヶ野鉱山は1953年に閉鎖されたが、昭和初期の山ヶ野小学校校歌には、「黄金花咲く我が郷は島津の御世に幾百年」などと歌われている（写真16）。

しかるに今日の山ヶ野には、国や県の指定文化財として保護されている鉱山遺跡は皆無である。わずかに上ノ夢想谷の<sup>6)</sup>島津興業所有地にある徳源社が、横川町の町指定文化財になっている程度である。この徳源社は寛永期山ヶ野金山を開坑した宮之城領主島津久通（徳源公）を祀る社で、その夢想谷上方に「湧き上り」と称された金鉱露頭地が久通によって発見されたと伝える。1659年創建と伝える山ヶ野の上ノ上本町に鎮座する山ノ神社（大山祇神社）は、1887年の大火で焼失したが、閉山後の1966年に山ヶ野各地区関係者によって再建された。この山ヶ野の歴史的鉱山地は、長年の自稼請負を通じnativeな側面が強く醸成され、集落の家並みにその歴史的環境が反映されている。かかる由緒ある山ヶ野金山地の資料展示も、JR横川駅近くに立地する横川町郷土館の一角に「山ヶ野金山」のコーナーが設けられている程度である。山ヶ野の集落にはなんの金山関係施設もなく、鉱山遺跡の調査、保護、活用の動きなどみられない現状である。

なお、伊豆半島西岸にみられる静岡県土肥町指定史跡の「土肥金山」の坑道跡ごときは、土肥マリン観光株式会社によって坑道の一部が観光坑道として整備され、観光客を集めている（写真17）。

〈吹屋の町並み、吉田村のたたら山内〉<sup>さんない</sup> 吉備高原面上に取り残された、旧吉岡銅山地の岡山県川上郡成羽町吹屋にも、1954年の暮にはじめて訪れた。その当時は、成羽町合併直前でまだ川上郡吹屋町であったが、前述の島根県大森同様に、まさに歴史の歯車が止まった感じさえ抱かせる過疎のマチであった。しかし、高原の山あいには赤茶色に輝く石州瓦の家並みが続き、色あせた赤色のベンガラ格子や塗り込み造りなどをもった堂々たる商家のたたずまいには圧倒された（写真18・19）。かかる吹屋の商家の町並みが、1977年には国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、1974年の岡山県「ふるさと村」指定とあいまって脚光を浴びてきた。

同じ中国筋で旧大鉄山師・田部家の本拠地である島根県飯石郡吉田村を1991年10月に訪ねた。「村おこし」の柱として、1986年に「鉄の歴史村」を宣言した吉田村には、財団法人の「鉄の歴史村地域振興事業団」が組織され、「鉄の歴史博物館」、「山内生活伝承館」、「鉄の未来館」などが設置されてきた。とくに「菅谷<sup>すがや</sup>たたら山内」<sup>たかどの</sup>（写真20）は、国の重要民俗資料に指定されている高殿を中心に、「山内」のたたら製鉄空間がみごとに保存された、全国でも珍しい場所として注目されている。高殿付近の米倉には菅谷鋳製鉄用具141点が保管され、県の民俗資料に指定されている。

## Ⅱ. 主要坑口付近の鉱山跡地

〈端島<sup>はしま</sup>と松尾のゴーストタウン〉 明治後の鉱山業近代化は、中心的な通洞坑や立坑の開鑿によって坑内の採鉱、輸送システムの統一化を促進した。かくして通洞坑口や主要立坑口を中心に、管理、選鉱、製錬など鉱山事業部門や、住宅、病院、購買など厚生福祉部門の鉱山企業諸施設で特色づけられる、foreignな企業集落が形成された。このように明治後新しく形成された鉱業空間＝近代集落域は、鉱山企業によって統轄された統一地域（integrated region）であり、またそれは主要坑口を結節点として形成された結節地域（nodal region）としてとらえることもできるであろう。

かくして鉱山企業が撤退し、坑口が閉鎖されれば、鉱山活動による機能組織（functional organization）は崩壊し、foreignな企業集落は急速にゴーストタウン化するのが自然の理である。筆者がかつて典型的な三菱の単一企業集落（single-enterprise community）<sup>にしそのぎ</sup>として取り上げた、長崎県西彼杵郡高島町の端島（軍艦

島)はその好例である(写真21・22)。端島は1955年4月1日に高島町に併合されたが、その当時面積0.1km<sup>2</sup>の小島に人口4,770を数える超過密空間を形成していた。しかし、1974年1月15日の閉山後3ヶ月にして人口「0」の無人の島と化した。筆者は第2立坑によって支えられてきたこの端島を閉山5日前にも訪れてみたが、その後のゴーストタウン化の様相については、雑賀雄二写真集『軍艦島 棄てられた島の風景』<sup>8)</sup>ほかなどで広く知られている。1993年現在もなお林立する高層建築物など放置されたままの無人の島である。

筆者が1961年にはじめて訪れた岩手県松尾鉱山の鉱山集落(元山)も典型的な単一企業集落であった。この鉱山集落は一般民有地からかなり隔絶した海拔900m前後の広大な国有地の中に島状に形成されていた。1960年10月1日現在人口10,288をも数え、近代的な総合病院や鉄筋アパート群も林立する大集落の生活空間が展開していたが、「脱硫硫黄」などの出現で1969年11月12日閉山に追い込まれ、1972年10月に筆者が訪れた折には無居住地と化していた。

かかる端島や松尾の鉱山集落のように、隔絶した立地環境に形成された単一企業集落の場合、閉山後その鉱山跡地は放置されたままの状況にあるのが一般である(写真23)。かかる場合、鉱山跡地の環境保全の問題がクローズアップしてくるのは当然であろう。かつて硫黄や硫化鉄鉱を産した松尾の鉱山跡地では、1981年11月に鉱水処理施設や貯泥ダムが完成するなど、「よみがえる北上川」をキャッチフレーズに鉱害防止事業が進められてきた(写真24)。

〈別子銅山の鉱山跡地〉 別子銅山の明治後における坑内運搬系統の近代化は、銅山越北側の現新居浜市東平<sup>とうなる</sup>に坑口を開く第3通洞、さらに低位の同市端<sup>は</sup>出場に坑口を開いた第4通洞の開鑿によって象徴された。1916年以降別子銅山の本拠は銅山越南側の別子山村内旧別子東延から北側の東平の第3通洞坑口付近に移り、さらに1930年ごろ以降は第4通洞坑口付近の端出場に移った。かかる銅山本拠の移動により、元禄期から明治期まで長年別子銅山の拠点であった現愛媛県宇摩郡別子山村内のいわゆる「旧別子」の大鉱山集落の壊滅と、その跡地の荒廃は余りにも著名である。北側の東平は、本拠が端出場に移動後も鉱山集落が存続し、1968年3月末に第3通洞坑口が閉鎖されるその直前にはまだ約490世帯もの鉱山集落があった。しかし坑口閉鎖によって社宅は焼却され、海拔約744mの東平の坑口付近一帯は無人空間と化した。1968年には延長4,000m台にも及ぶ大斜坑が完成し、鉱山の経営合理化が強行されたが、別子銅山は1973年3月末で最終的に閉山した。そして第4通洞坑口、大斜坑口付近などの端出場一帯に分布した銅山本拠諸施設の撤去が進められた。この端出場の旧選鉱場、採鉱本部などの鉱山跡地が、その再生をめざし、第3セクター「㈱マイントピ

ア別子」による鉱山観光拠点としてオープンしたのは、1991年6月のことであった（写真25・26）。

1989年に設立された(株)マイントピア別子は、官民一体の第3セクター方式の会社で、資本金2.4億円で出発した。その株主は国の産業基盤整備基金、新居浜市、別子山村、住友金属鉱山(株)、住友林業(株)ほか計23を数えた。その施設面積は63,046m<sup>2</sup>であったが、その用地は住友金属鉱山(株)から固定資産評価額の6%の賃借料でもって賃貸借することとなった。建設総事業費47.4億円の財源は、新居浜市一般財源14.24億円、起債21.16億円、第3セクター分12億円でまかなわれた。

鉱山観光の中心施設は、マイントピア本館（端出場記念館）で、銅板葺の屋根と赤レンガを基調とした明治風の鉄筋コンクリート造り4階建の堂々たる建造物である。この建物の中には、新居浜市が管理運営（業務はマイントピア委託）する480人収容可能な温泉施設「ヘルシーランド別子」や、(株)マイントピア別子直営のレストラン、大食堂、ショッピングプラザなどがある。しかし、この端出場の鉱山観光の目玉は鉱山鉄道と観光坑道であった。鉱山鉄道は本館の「はでば駅」から延長410m、トンネルや国領川を渡る「うちよけ鉄橋」を経て、観光坑道の坑口に近い「うちよけ駅」に至る。溪谷美を堪能した後延長333mの観光坑道に入り、マグシーバーの案内で別子銅山の歴史を物語る諸設備を見学し、坑内地底の世界を体験する。しかし、この観光坑道はかつての火薬庫跡を利用したもので、前述の生野や後述の足尾、尾去沢、串木野、鯛生<sup>たいお</sup>などの観光坑道のように、かつての通洞坑口を利用したものではない。筆者も1954年にはじめて入坑した前述の第4通洞坑口は固く閉ざされたままである。

この端出場の(株)マイントピア別子の観光拠点から国領川を下ると、溪口の新居浜市角野<sup>すみの</sup>新田町に大山積神社が鎮座し、その境内続きに屋根一面にサツキが咲く別子銅山記念館がある（写真27）。大山積神社はかつて銅山峰南側の「旧別子」の目出度町に鎮座していたが、東平などを経てこの地に遷座したのは1928年であった。別子銅山記念館は閉山後2年過ぎた1975年6月に住友グループによっていち早く開館され、282年間にわたる別子銅山の関係資料が展示公開されるに至っている。その背後の山頂に今も姿をみせる煙突は、1888年に建設され1895年には煙害問題で閉鎖された山根湿式銅製錬所の高さ20有余mの赤レンガの煙突である。この煙突は製錬所が山頂近い「旧別子」から山麓の山根、海岸の新居浜惣開へ、さらに四阪島へと煙害問題をかかえながら移動した別子製錬史の一齣を今に伝える歴史的遺構である。

この西方山麓の新居浜市山根町には住友家の霊廟長泉堂のある曹洞宗瑞応寺

が立地するが、その本堂の大屋根は住友家寄進の別子銅による青銅葺きである。なお瑞応寺本堂の左手奥地の東墓地一角には、1899年8月の「旧別子」大水害で銅山川に水難流亡した人たちの「別子銅山遭難流亡者碑」が薄暗い木立の陰に立つ。さらに本堂右手西方の西墓地には、住友金属鉱山(株)の管理墓地があり、「別子銅山坑内火災殉職者之碑」など銅山災害で没した人たちの石碑が並ぶ。このなかには「旧別子」の大集落遺構のシンボル蘭塔場(墓地)にあった、1694年4月の大火災の犠牲となった銅山支配人泉屋助七ほか開坑当初の功労者の石碑が、この瑞応寺西墓地に移されており、今日も旧盆には蘭塔場法要が営まれている。<sup>9)</sup>これらは「旧別子」など鉱山跡地につながる風景で、端出場の(株)マイントピア別子の観光施設を核とした別子観光圏の一部をなすものとして位置づけられる。

なお(株)マイントピア別子は、前述した端出場地区鉱山跡地の観光地化事業に続いて、海拔744mの第3通洞坑口を中心とした東平の鉱山跡地に、歴史資料館やマイン工房などを建設する計画を立てている。この東平地区には「銅山の里自然の家」の研修施設だけがあるが、かつて最盛期には人口約3,000に及ぶ大集落を形成していた。筆者は1955年ごろ今は廃墟の東平の鉱山施設に宿泊し、また第3通洞坑口から俗称「かご電」の坑内電車に便乗して何回か別子山村の日浦坑口に出た。当時はこの「かご電」が別子山村の人たちにとって北の新居浜側に出る唯一の交通機関であった。今日は大永山トンネルの完成によって、新居浜方面から銅山川流域の別子山村に入る自動車ルートも全通し、端出場を核とした別子観光圏の拡大をみている。

〈足尾銅山の<sup>ほんざん</sup>鉱山跡地〉 足尾銅山における明治後の鉱業空間は、かつて論述したように、本山、小滝、通洞の主要3坑口を核に展開された。本山地区に直結して立地した製錬所による煙害などで山地荒廃が進み、近世足尾郷の松木村は1901年に廃村に追い込まれた。赤倉の龍蔵寺境内には「松木村無縁塔」が、今日も製錬所の煙突を背にした風景をくり広げる(写真28)。大正期には本山、小滝の両選鉱場は廃止され、通洞坑口への運鉱の集中化によって、足尾銅山の中心は本山地区から通洞地区へと移動した。

1954年7月には経営合理化のために小滝坑口が閉鎖された。盛時の大正期には人口1万余を数えた小滝の集落は、閉鎖直前の1954年4月1日現在335戸を維持するも、同年10月末に筆者が踏査した折には町内他地域にすでに移っており、集落の急速な消滅をみていた。この庚申川河岸の旧小滝坑は足尾町史跡に指定され、銅山施設などあった中心跡地には、「ここに小滝の里ありき」の碑が立つ(写真29)。この碑はかつての居住者の「小滝会」によって1986年に建立された

もので、「山晴れ水澄む我等の小滝 自然は常に我等を恵む」と碑に付記され、周辺の環境整備も進んでいる。筆者は上記集落移転直後の風景を想起し、夏の緑に包まれた溪谷美の前にまさに隔世の感を強めた。その奥地には「中国人殉難烈士慰霊塔」が茂る木立の陰に立っていた。

1973年2月には製錬部門を残して、足尾全山の採鉱部門はついに閉鎖されるに至った。足尾町人口もピークの1916年の人口38,428に対し、閉山後の1975年にはわずかに6,948を数える規模となった。本山地区は製錬所にも近く、小滝地区とは対照的にいまだに荒廃した風景をくり広げる。本山鉱山神社は足尾町の文化財に指定されているが、その界隈の荒れた風景が、鉱員社宅などあった本山の跡地風景を象徴していた（写真30）。

閉山前には選鉱場や事務所などあり、足尾銅山の中心をなしていた通洞坑口付近の鉱山跡地には、1980年4月に別子より早く「足尾銅山観光」がオープンした（写真31）。この「足尾銅山観光」は古河の鉱山所有地を無償借地の上、町営でスタートした、坑内観光主体の観光施設である。全長700mの観光坑道の内、通洞坑口から観覧車で160m坑内に入り、あとは各時代の展示場や、1988年にできた「宇宙空間展示場」などの坑内展示物を見学して坑外に出る。通洞坑口付近には、鑄銭座や野外展示物、さらにレストハウス、売店、資料館、駐車場などがあり、足尾銅山観光地区を形成している。オープン以来10年間に延べ350万人の観光客が訪れたが、入込客数は横ばい状態で施設などの整備拡充が求められている。第3セクターによる銅山観光開発のリフレッシュ計画も立てられている。町当局はかかる観光開発や企業誘致に熱意を示すも、町人口は減少傾向を続け、1989年4月には4,935と5,000人を割るに至った。人口の過疎化や高齢化の進行は今後も予想される状況にある。

〈尾去沢鉱山の鉱山跡地〉 東北地方で坑道観光に本格的に乗り出しているものに、秋田県鹿角市尾去沢字獅子沢の「マインランド尾去沢」がある。1982年3月に鹿角市、(財)秋田県観光物産公社、尾去沢鉱山(株)、(株)日本交通公社、秋北バス(株)ほか計11の株主によって「(株)尾去沢鉱山観光」が設立され、同年の東北新幹線の開通にあわせて「マインランド尾去沢」がオープンするに至っている。

筆者がはじめて尾去沢鉱山を訪れたのは1958年の10月であったが、当時、獅子沢（鹿沢）地域一帯には三菱金属鉱業(株)尾去沢鉱業所の採鉱、選鉱、製錬などの鉱山諸施設が並んでいた。その折、筆者は採鉱施設のある石切沢坑口から坑道づたいに南西方の田<sup>た</sup>郡<sup>ごおり</sup>沢に出て、川口家で近世鉱山絵図を調査したが、その石切沢坑口を中心に今日「マインランド尾去沢」の鉱山観光施設地域が形成



されている。尾去沢鉱山の製錬所は1966年に廃止となり、鉱山自体も1968年には縮小を余儀なくされ、1978年にはついに閉山に追い込まれた。今日はかつてのシンボルであった製錬所の煙突や、選鉱場などの跡地の風景をみるが（写真32）、それらに続いて採鉱施設跡地に前記の鉱山観光施設が立地し、観光客を集めている（写真33）。

この鉱山観光施設のメインは「鉱山歴史の坑道<sup>みち</sup>」で、「石切澤通洞坑」とある坑口（写真34）から入り、徒歩による順路コースは約1.7km、所要時間45分にも及ぶかなりの規模の観光坑道である。深い峡谷状の銅鉱脈採掘跡グランドメインキャニオンをはじめ、坑内諸施設、演出の展示などが近世、近代にわたってみられ、マグシーバーの説明による文字通りの地底博物館をなしている（写真35・36）。坑外には「鹿角市鉱山歴史館」を中心に、売店、お休みコーナー、バスターミナルや広大な駐車場などが設けられている。1973年から1986年まで鹿角市植樹祭を実施し、公園化も進めて環境整備に努めている。1989年には旧電車坑道を利用した「コスモ・アドベンチャー」がオープンし、レーザー光線などを駆使したファンタスティックな情景が体験できる施設として加わった。前記の観光坑道とあわせて1990年は653,001人の入場者をみるに至っている。

これらの鉱山観光は、十和田、八幡平の自然指向の観光ルートにおいて、その中間に位置する産業遺跡利用の文化指向型の目的観光地として位置づけられている。これらは鉱山の産業遺跡として重要な鉱山跡地を保存活用し、地域の活性化を意図して設けられたものである。尾去沢の人口は1955年のピーク時には11,012を数えたが、閉山3年前の1975年には4,964と落ち込み、以後1989年には4,357（住民台帳）と漸減傾向を示している。尾去沢は町制を施行した1936年の11月に鉱山の鉱滓ダムが突然決壊し、死者400余人に及ぶ大惨事が起きたが、かかる鉱滓ダムなど鉱山跡地の環境保全整備を続けることが大切である。

〈串木野鉱山の鉱山跡地〉 炭鉱跡イメージに比し金鉱跡イメージにはあるロマンが漂い、九州における坑道観光としては、後述の大分県中津江村の地底博物館「鯛生金山」と、鹿児島県串木野市の「ゴールドパーク串木野」が双璧をなした。かつて島津藩領は山ヶ野、芹ヶ野（串木野）の著名な金山などもつ産金地で知られたが、明治後は三井資本によって鉱山経営の近代化が進められた串木野鉱山がとくに脚光を浴びた。当鉱山は1919～1923年には日本一の産金量を記録するまでとなった。

筆者は1958年にはじめて当鉱山を訪れた。当時、鹿児島本線串木野駅北方500m有余の下名に、三井金属鉱業(株)の串木野鉱業所〔1964年以降三井串木野鉱山(株)〕や、1914年日本最初のコスモ青化製錬をみた製錬所があり、さらにその北方

約3kmの野下の通洞坑口に採鉱事務所があった。1号鍾などの主要鉱床を中心に開発され、採掘鉱石は東部斜坑、中央斜坑、新斜坑などの斜坑を経て2番坑に巻き揚げられ、さらに2番坑道を電車で通洞坑口まで送り、ここから坑外を上記製錬所まで電車送鉱されていた。採鉱事務所は後に通洞坑口から東部斜坑口方面に移されたが、三井串木野鉱山(株)は通洞坑口付近の旧鉱山事務所、社宅などの跡地を拠点に、坑道観光を柱とした鉱山観光事業に乗り出し、子会社「串木野金山観光(株)」を設立し、1988年に前記の「ゴールドパーク串木野」(写真37)をオープンするに至った。

この坑道観光の圧巻は、まず通洞坑口からマインシャトル号と称する電車で、旧採掘区域に接する地底ステーション(写真38)まで旧2番坑道を約700mにわたって観光客を乗せて突っ走ること、その規模は前述の足尾など到底及ばない。地底ステーションから徒歩で坑内の金鉱脈や、立坑、大斜坑、採掘切羽、発破掘進機械などの現場施設を見学する。とくに坑内の一角には、1930年に建立され、戦中応召後1974年に再建された黄金の観音像が安置され、また1906年以来の三井による採掘量55トン<sup>1</sup>を12.5kgのインゴットに換算した4,400個分が、ピラミッド状に積み上げられた模型「黄金のピラミッド」など、黄金をテーマにしたものが目立つ。地底イベントホールでは1993年4月訪問時には子供向けのウルトラマン、怪獣の特別企画を催していた。なお、600m先きは「生きた鉱山」として通行止めした坑道に出会ったが、今日も小規模ながら操業を維持する鉱山での坑道観光であるだけに実感がこもる。

通洞坑口付近のかつて採鉱事務所や社宅などのあった跡地には、Gold Museum、Gold Saloon、純金メッキ実演コーナー、砂金採り場、ローイングトロッコほか諸施設や、駐車場などが設けられ、背後の新緑萌える山地とコントラストをなす風景を展開していた。

〈日立鉱山の鉱山跡地〉 茨城県日立市の日立鉱山は、1905年に久原房之助が赤沢銅山を買収して日立鉱山と改名し本格的な開発に乗り出すや、数年にして全国有数の大銅山として台頭するに至った。日立鉱山の鉱業空間は、宮田川上流に位置する本山<sup>もとやま</sup>の採鉱・選鉱部門、それから約3.5km下った大雄院の製錬部門、そして溪口付近芝内の電錬部門に至る一貫した完結的展開をみせていた。しかし、1981年には76年間に及ぶ日立鉱山本山地区の歴史にピリオドがうたれ閉山を余儀なくされた。

採鉱、選鉱などの本山地区の鉱山跡地は、前述例のごとき本格的な坑道観光としての利用は見られず、日鉱創業80周年記念事業の一環として、「日鉱記念館」がその跡地に設けられた(写真39)。鉄筋2階建、総床面積約440坪の本館には、

日立鉾山の歴史や日鉾の現況、展望など示した豪華な第1・第2の展示室、模擬坑道などが設けられている。記念館構内には、前記本館のほか、さく岩機、大型機器、鉾石標本など解説展示した旧コンプレッサー室利用の鉾山資料館や、第1立坑、第11立坑、旧久原本部、塵外堂ほかなどが立ち並ぶ。なお、この構内通路わきには石川県尾小屋鉾山製造の六角形「カラミ煉瓦」が並んでいるのが目についた（写真40）。

かかる緑深い山地を背景に整備された記念館構内の風景に対し、背後の山腹に鎮座する山神社境内一帯の荒れた風景は全く対照的であった。明治末から大正期にかけての本山の風景は、1908年まで製錬所がここにあったために樹木のない裸地の山が広がり、その中に山神社の建物、鳥居、参道の風景だけが目立つ様相を呈していた。しかし今日は、山神社の建物や参道が生え茂る樹木の中に隠れてどこにあるのかわからぬ状況である。

製錬所が存続する大雄院には、1915年完成の高さ155mの大煙突がみられ、日立市のシンボルをなしてきたが、1993年にそれが折れたニュースはまだ耳目に新しい。宮田川溪谷は日立市民にとって夏季の屋外レクリエーション活動の好適地と目され、本山地区の鉾山跡、社宅跡などを再利用した施設整備計画が、日立市観光協会によって進められてきた。しかし、溪谷沿いの日鉾社宅跡などの整備は遅れ、また鉾山観光事業によって観光客を呼び集める動きもまだ目立っていない。

〈三井田川の炭鉾跡地〉 福岡県田川市の国調人口ピークは1955年の100,071で、当時は文字通り筑豊最大の炭鉾都市であった。1956年12月末当時、市域には7つの鉾業所があり、全鉾業従業者数は11,726を数えたが、その従業者数の80%余を占めた三井鉾山(株)田川鉾業所が圧倒的な存在であった。この三井田川も1964年に閉山し、1969年の新田川炭鉾の閉山を最後に市域から炭鉾の姿が消えた。市人口も1990年には57,700とピーク時の58%近くに減少をみたが、市全域にわたって、炭鉾事業所跡、炭住跡、ボタ山跡、地盤沈下跡など、広大な炭鉾関係跡地が残存し、ここでは到底それらについて詳述できない。ボタ山跡地の大規模な団地造成や炭住の改良事業をはじめ、炭鉾関係跡地の環境整備や再生事業が山積するマチの風景の中で、2本の大煙突で象徴される「田川石炭記念公園」が1981年に完成をみている（写真41・42）。

この石炭公園には、1983年に建設された「田川市石炭資料館」をはじめ、2本の大煙突、立坑ケイジ、蒸気機関車、大型機械設備類、坑夫像大噴水、「炭鉾殉職者慰霊碑」、「韓国人徴用犠牲者慰霊碑」、元市長の「坂田九十百先生像」ほかなどがみられる。この石炭記念公園は、JR田川伊田駅に近接してその南西に

あり、造成有効面積は23,900m<sup>2</sup>に及んだが、この場所はかつての三井田川鉱業所伊田坑の炭鉱事業所地域で、第1・第2の両立坑を中心として形成されていた炭鉱事業所の跡地であった。その代表的な遺構風景は、ドイツ製耐火煉瓦をも使用した2本の大煙突と、第2立坑ケイジであった。この両者の遺構を柱に、またそれらを目玉に、市によって記念公園が造成された。

シンボルの大煙突は高さ45.45m、下部直径5.6mに及び、第1・第2立坑捲上げ機の動力用ボイラー排煙のために、1908年に設けられた貴重な産業遺物である。全国的に愛唱された「炭鉱節」に登場するだけでなく、今日の田川市民の歌「知っていますか ふるさと」の中にも「2本の煙突 歴史にとどめ」と歌われているように、2本の大煙突は今日も田川の心象風景のシンボルとして生きている。この大煙突北西方の松原にはかつて広大な炭住街が形成されていたが、その古い炭住の一部が1993年8月現在も残存し、新装なる5階建の市営アパートなどとコントラストな風景を展開していた（写真43）。

〈三菱美唄、北炭幾春別の炭鉱跡地〉 北海道美唄市のJR美唄駅から東方、美唄川の溪谷を後述の大夕張と同じ「美鉄バス」でさかのぼると、「我路ファミリー公園」先でバスは終点となる。このファミリー公園は旧沼東中学校グラウンド跡に1977年開園されたが、白樺の林も美しいこの公園の一角に、「開山大正元年 閉山昭和四十八年」と誌す「炭山の碑」（写真44）があり、また三菱美唄記念館も設けられている。この公園付近から奥地一帯、美唄川、東美唄川両溪谷にかけて三菱の「美唄炭山」地域がかつて形成され、大正期にはすでに美唄鉄道が「美唄炭山」、「常磐台」の各駅を経て第4坑に近い「二の沢」駅まで通じていた。

この「美唄炭山」地域一帯の人口は、1960年当時実に23,053をも数えたが、その後炭鉱縮小などで1970年には人口4,932まで減少し、そして1972年の三菱美唄炭の閉山を契機に、1992年9月現在のように無居住地域と化した。かかる縮小、閉山で山腹に広がっていた炭住街や、この地区にあった小中高の6つの学校などすべて姿を消し、旧常磐台駅の選炭積込場近くにみられた2つの立坑ケイジのみが谷間の荒野の中に代表的な産業遺物として残存している（写真45）。美唄市役所都市計画課では、この付近に炭鉱メモリアル公園を設置する工事を1992年9月踏査当時進めていた。なお下流の我路方面では美唄鉄道跡がサイクリングロードとして整備されていた。

北海道の三笠市域には幌内、幾春別、奔別、弥生、新幌内、唐松ほかなどの炭鉱が分布したが、1989年の幌内炭の閉山を最後に、市域から炭鉱が姿を消した。かかる市内各地の炭鉱跡地、北炭用地の利用でとくに目立つのは、北炭幾

春別炭鉱跡地を利用した錦公園と、道内鉄道発祥地の旧幌内駅一帯における「三笠鉄道村」建設である。幾春別錦町には市文化財で、1885年に農商務省が開坑着手したことを示す「郁春別煤田の碑」があり、その近くに1979年「三笠市立博物館」が建設され、公園化が進んでいる（写真46）。この地域は1956年閉山の北炭幾春別炭鉱の選炭場やボイラー施設、炭住などのあった幾春別川右岸の錦町で、その対岸の川向町、山手町にかけて旧炭住などの北炭用地が続き、公営住宅地などとなっている。錦町北炭用地に接してその北方には、旧住友別炭鉱用地が広がるが、1971年の別炭鉱の閉山で、別地区には広大な無居住地域が形成された。別町の旧住友別炭鉱事業用地には、旧別立坑のみが炭鉱跡地のシンボルとしてその風景をとどめている（写真47）。

〈常磐磐城の炭鉱跡地〉 福島県のいわき市JR湯本駅近くに、1971年に閉山した旧常磐炭礦(株)磐城礦業所跡があり、その跡地に1984年10月に「いわき市石炭・化石館」がオープンした（写真48・49）。これに隣接して「昭和の杜六坑園」が、1947年に昭和天皇が磐城礦業所の湯本第6坑人車坑より入坑されたのを記念して、1988年に旧第6坑口付近を整備して設けられた。近くに湯本山神社も鎮座するが、かかる山神祭の諸行事をはじめ炭鉱の生活様相などが、前記石炭・化石館の1階生活館に展示されている。このほか石炭展示室、化石展示室がある。

さらに石炭・化石館の1階には模擬坑道があり、立坑で地下600mの坑底まで降りる雰囲気をつくり、採炭状況の移り変わりなど再現している。模擬坑道で坑道観光を代替させているのは興味深い。近くには炭鉱時代の煙突や炭住の遺構なども残存するが、木造の辰の口炭住街跡などは荒れたままの状態で、八仙地区の炭住街などが改良整備されて市営アパートなどとなっているのと対照的である。

### Ⅲ. 過疎地域振興と鉱山跡地

〈大分県中津江村と鉱山跡地〉 大分県日田郡中津江村は、村内の鯛生金山跡地を村おこし、ふるさと創生の拠点に活用し、大分県の一村一品運動で脚光を浴びた。中津江村は筑後川源流域に位置し、日田杉の造林でも知られる山峡の里である。本村に鯛生金山が登場するのは1897年ごろ以降で、1972年6月に閉山するまで70有余年間、鉱山をもつ村としての歴史を歩んだ。

鯛生金山の全盛期は1933年ごろから1938年ごろにかけてで、とくに1932年、1933年の産金量2.2トン、2.3トンは本邦第1位を占め、一時は東洋一の大金山であったと今日も誇示される。この鉱山地域は福岡県境をまたげて大分県の本

村から福岡県の矢部村に及んでいた。上記全盛期には鉱山従業員数は約2,500、請負組約500を加えれば約3,000にも上り、従業員の鉱山社宅は本村鯛生側約400、矢部村側約400と両県にほぼ相半して分布していた。本村の国調人口のピークは1935年の7,528で、同15年の7,286がこれに続き、前記金山全盛期の鉱山集落のにぎわいが、村人口のピーク期を形成した。戦後の20年間は5,000人台から4,000人台の村人口を維持した。しかし、1965年の4,404の人口は1975年には2,140と半減以下となった。これは蜂之巣城のダム反対闘争などで著名な下釜ダムが1968年に完成し、これによる栃原地区の水没と、金鉱枯渇による鯛生金山の1970年休山、1972年の閉山などが人口減少傾向に拍車をかけた。

かくして大分県下屈指の過疎の村となった当村は、早急な村づくり対策の重点事業として鉱山跡地利用に着目し、鯛生鉱業(株)に協力を要請した。これに対し鯛生鉱業側から、金山跡地を含む社有地一切の約70haを村発展のために無償寄付するという申し出があり、村当局はこれをうけて「鯛生金山観光開発事業」を計画するに至った。<sup>10)</sup>1981年から本事業計画が本格的な実施に移され、1983年4月には地底博物館「鯛生金山」がオープンした(写真50)。1986年度までのその事業費総額は9.7億円にも上ったが、竜門ダム分水に伴う水源地域振興基金の一部などが自主財源としてこの観光事業の実施を支えた。1985年の村人口は1,587と過疎化は進んでいたが、同年には地底博物館が大分県一村一品功績賞として県知事平松守彦から表彰され、全国的にも注目された(写真51)。かかる金山観光事業は、人口減がなお続くように、過疎化を防ぐ上に積極的な役割を果たさなくても、ゴールドで象徴されるドラマチックなイメージを過疎山村に与えた。そしてそれは、他地の人々がとにかく来村してくれるような村づくりをめざす上に、大きな意義を有した。

ともあれ、1983年4月にオープンした村営の地底博物館「鯛生金山」は、九州で最初の金鉱坑内観光施設として脚光を浴びた。この施設は、「一棒一条痕」(1934)(写真52)と刻む御影石を掲げた坑口から入り、坑内約1km、所要時間40~60分の見学コースをマグシーバーの案内に従いながら順路を歩むものである。この坑道観光のメインは第1立坑跡である。この付近にはコンプレッサーなどの鉱山機械類や鉱石を運ぶ鉱車、ローダーなどが展示され、また鯛生金山の鉱脈図、採掘断面図、坑道図、旧金山関係写真類なども展示されている。さらに昔の採鉱場などの光景が示され、一連の作業風景も展示する。また作家松本清張作「西海道談綺」のパネル展示坑道も設けられ、その幻想的雰囲気観光客は魅せられる。筆者は1993年8月にこの鯛生で各自マグシーバーをもった子供連れの家族が観光坑道に入る風景に接し(写真53)、1974年に豪州ニューサ

ウスウェールズのブロークンヒルで鉱山見学した折に出会った、オーストラリア人の子供連れファミリーを思い出した。

観光坑道を出ると坑外には、管理事務所、金山資料館、レストハウス、農協直売の「一村一品の館」、駐車場、グラウンドなどが旧金山坑外施設用地跡に設けられている。かつての建物が残っているのは製錬所だけであるが、ここは金鉱滓を釉薬として使用した鯛生焼の窯元施設となっている。かかる主要坑口付近の坑外地区には事務所、分析、機械、工作、倉庫、発電などの諸施設のほか、中核の製錬所と関連して広大な鉱滓堆積物が数ヶ所にかつて分布していた。これら鉱滓堆積物の下流に鉱滓沈殿池が設けられていたが、観光開発とともに環境整備も進められてきた。鉱滓による河川汚濁という社会問題は、すでに大正期から鉱山側と中津江村との間で起きていた。さらに1924年ごろには鉱滓が津江川に流出して日田の名産鮎の激減などもたらし、日田漁業組合との対立はいわゆる<sup>11)</sup>鉱毒事件として注目された。

前記の鉱山観光施設を見下す山地斜面には、旧職員社宅跡などに設けられたモダンな村営のキャビンが立並び、近くに鎮座する忘れられた草深い山神社の風景とは対照的で感慨無量であった。

〈高知県大川村と鉱山跡地〉 前述してきたように、主要坑口付近の鉱山跡地が坑道観光を軸に活用されてきたのが一般的傾向であったが、高知県土佐郡大川村では異なった風景がみられた。この大川村は吉野川上流域の典型的な山村であったが、1972年の白滝鉱山の閉山と、翌1973年の早明浦<sup>さめうら</sup>ダム竣工にともなう村内船戸地区の水没によって、過疎化と高齢化が進んだ。国調人口ピークの1960年には村人口4,114を数え、鉱山所在の朝谷の集落人口は約2,000にも及んだ。しかし、1975年には933と村人口が1,000を下回り、さらに1990年には人口758と高知県下人口最小の自治体となった。

愛媛県境南側の海拔約800mのところに位置した白滝鉱山は、近世期からその開発の歴史をもつが、明治末期から白滝鉱山と改称され、大正期にかけ設備の拡大が進められた。とくに、1919年久原鉱業(株)がその開発に乗り出し、従来付近一帯に煙害をもたらしていた製錬所を廃止し、採鉱、選鉱の施設整備拡大を推進した。1929年には日本鉱業(株)が経営を引き継いで鉱山の発展をはかり、従来の第1選鉱場（中央選鉱場）に対して、第2選鉱場を建設し、また白滝通洞（1,417m）の開鑿を完了した（第2図）。戦後の1957年には白滝鉱山の廃液による吉野川の汚染が補償問題にまで発展したが、その一応の解決後は操業収支の黒字をめざして増産計画を進め、新鉱床の発見にも努めた。しかし、1968年ごろからは経営の悪化が目立ち、ついに1972年1月大火後の同年3月閉山に踏み

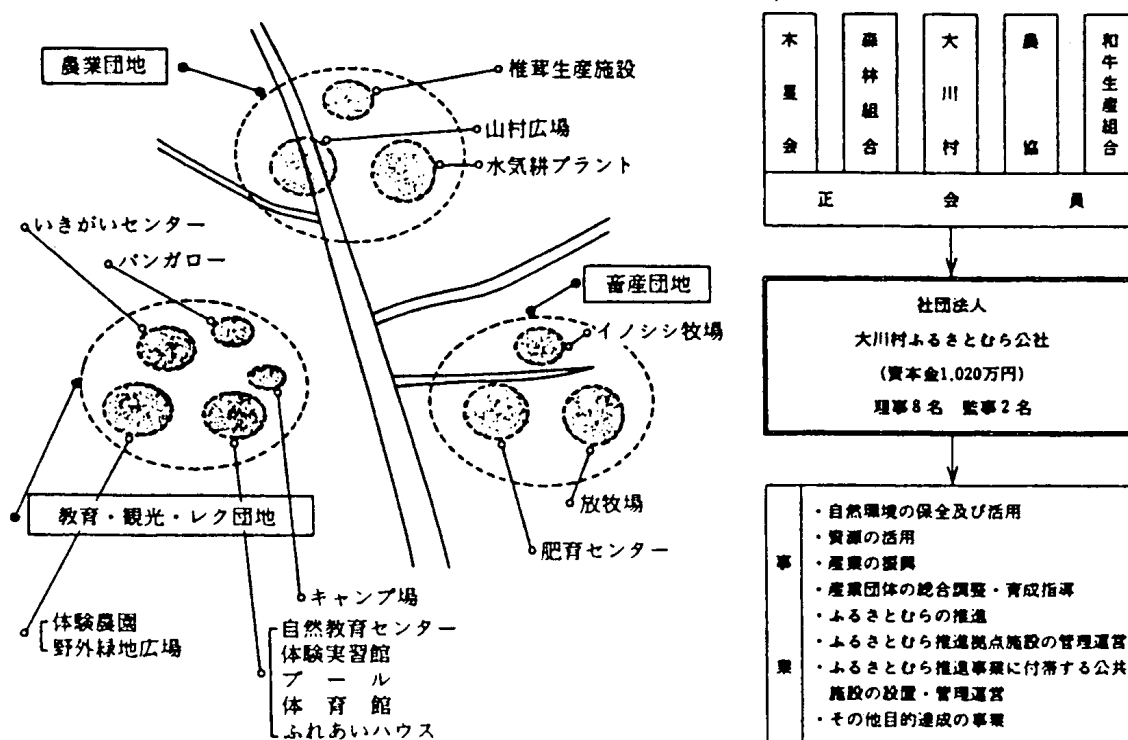




切った。

ところで注目すべきは、閉山翌年の1973年6月には早くは日本鉱業と高知県及び大川村土地開発公社との間で鉱山跡地の売買契約が成立していることである。その内容は日本鉱業が大川村朝谷のモミノ木23-1ほか155筆の3,504,200.59<sup>m</sup><sub>2</sub>を立木及び建物その他を含めて9,500万円で売却するというもので、その代金の半分を高知県が負担し、残りの半分を大川村が現金で支払うという内容であった。さらに1979年4月には、さきの1973年の白滝鉱山跡地売買契約で取得していた県有分が24,437,245<sup>12)</sup>円で大川村に売却され、ここに白滝鉱山の跡地はすべて村有地となった。

1976年、1977年と続いた台風災害は村の暗い前途に追い打ちをかけたが、1981年には「大川村総合開発計画」が策定され、村の存亡をかけた村づくりが開始された。そしてこの構想を具体化するための拠点地づくりとして、日本鉱業から譲渡された鉱山跡地400haの活用が着目されるに至った。主要集落の水没などもみたこの峡谷山村にとって、鉱山跡地400haは残された唯一のまとまった土地であった。この鉱山跡地を「教育、観光、レクリエーション団地」(写真54)、「畜産団地」(写真55)、「農業団地」(写真56)の三つのゾーンに分けて開発する計画が立てられ、1985年に設立された「社団法人 大川村ふるさとむら公社」が



第3図 高知県白滝の里ゾーニングとふるさとむら公社の機能  
(増淵隆一「過疎を資源としたふるさとむらづくりー高知県大川村白滝地区」)

その推進の中心的役割を果たした（第3図）。また翌1986年には自然王国「白滝の里」をキャッチフレーズとした関連施設整備事業が導入されるに至った。1989年までにこの白滝地区に総額23億円の事業費がかけられ、上記の計画構想は具体化されていった。

前記3つのゾーンの内、「農業団地」は白滝坑通洞などに近接した第1選鉱場、総合事務所、倉庫などが立地した捨石堆積場の広い鉱山跡地で、1987年から公社直営のトマトの水気耕栽培がここで開始された（写真57・58）。これは海拔約800mのズリ山を平坦にして造成された「農業団地」であるが、土壌不足のため水気耕栽培施設が導入されることとなった。まさに大分県中津江村の鉱山跡地活用風景とは対照的である。さらに「教育、観光、レク団地」は、樅ノ木一帯に立地した第2選鉱場、分析施設、現伊予三島市に通ずる索道施設、学校、住宅などのあった鉱山関係跡地であった。このゾーンには体験農園、ふれあいセンター、スポーツコミュニティセンター、自然教育センターほかの施設が整備され、都市住民と地域住民の交流の場として活用されている。

また「畜産団地」は、上記団地の対岸斜面に広がり、ここには中之谷の鉱山社宅などもかつて分布していた。この一帯で1983年には早くも村営放牧場の造成が開始され、肉用牛の供給基地として整備が進められた。ここで生産された黒牛の肉を用いるイベント「謝肉祭」は、毎年11月3日に催され、村最大のイベントとして青年団を中心になされる手作り行事である。1983年の第1回以来年々盛大となり、今日では11月初の2日間で3,000人が訪れる県下最大のバーベキュー祭りとして広く知られている。1985年の村人口751に対し、1990年には758とわずかに7人の人口増ながら明るい話題となった。

〈愛媛県別子山村と鉱山跡地〉 この高知県大川村白滝から、愛媛県境にある海拔約1,200mの大田尾越を車で北に越すと、吉野川支流銅山川の源流域に位置する別子山村筏津に出る。この峡谷山村の別子山村は1985年の人口が349で、前記大川村の同年人口751の半分以下といった全国屈指のミニ行政村である。しかもこの別子山村は、明治後も他と合併しないで近世期そのままの村域を今日なお踏襲している、まさに注目すべき山峡の里である。すでに述べたように、この別子山村の西端「旧別子」には、元禄期から明治期まで別子銅山の本拠地があり、文字通り「銅<sup>あかがね</sup>の里<sup>さと</sup>」としての歴史を有した。

北の新居浜市境の銅山越は、海拔1,291mで峠路には峰地蔵が祀られているが、この南斜面別子山村側には、住友のインカとまでいわれる岩山上の蘭塔場を中心に、「旧別子」の大鉱山集落跡の風景が広がる。1890年の銅山開坑200年記念に作成された「別子銅山図」の版画のごときは、1899年の大水害前の「旧別子」

の風景をみごとに描いている。1901年当時、なお「旧別子」は630戸、4,450人を数えた。劇場跡、醸造場跡、接待館跡、高橋製錬所跡、大山積神社跡、最初の坑口の歓喜坑跡など、多くの集落遺構が分布し、1955年踏査当時すでに「熔鑛爐跡」といったように木製の白い標柱で各遺構が示されていた。この「旧別子」も最近は緑が増してきたとはいえ、いまだに無人の廃墟そのままに放置されている状態である。しかし、「旧別子」全体が元禄の盛期に1万人を越す人口をも抱えた大鉱山集落の集落遺跡であり、それはまた別子銅山の重要な産業遺跡そのものとみるべきである。それだけにその遺跡・遺構の保護、活用が大いに望まれるが、それはまた環境保全の面からも大切であろう。

実はこの「旧別子」は別子山村にありながら、住友関係所有地として存続してきた。別子山村は典型的な峡谷山村で7,078haに及ぶ森林面積が村の97.6%を占めるが、1993年現在、「旧別子」を含むその58.7%が住友林業の社有林で、村有林22.5%、私有林18.8%を大きく上回っている。すでに筆者が指摘したように、元禄期以降、村内の広大な御林は銅山つきの御林として住友家が利用していたが、明治期後はこの御林が国有林となり引き続き住友家が借地、植林するところとなった。この住友借地国有林は今日は住友林業に払い下げられ、また村が借り受けていた北部赤石山系国有林も払い下げられ村有林となっている。かつて筆者が「山あって山のない村」と指摘した当村も、1,594haに及ぶ村有林を有する村となったが、なお60%に近い林野がforeignな住友林業の所有地となっていることは注目すべきであろう。「住友林業」の名の入った「火の用心」の赤い幟があちこちの谷口ではためく光景は、まさにその間の様相を物語る風景である。なお林野の61.5%が針葉樹で、植林によるヒノキ41.0%、スギ13.5%がその主体となっている。30.3%を占める広葉樹は自然林で雑木である。中腹以上の岩石地には植林不可能が多いが、みごとなヒノキやスギの美林が「旧別子」の鉱山跡地を除く村の中・西部で山麓近くまで続く風景は壮観である(写真59・60)。

ところで別子山村では1901年当時12,400を数えた村人口も、銅山の中心が村内「旧別子」から北側の東平、さらに端出場に移るに至って激減し、1933年当時にはすでに2,150人までに減少していた。別子銅山ならびに村内にあった支山筏津鉱山が1973年に閉山し、その2年後の1975年には実に村人口は403となり、さらに1985年の349人を経て、その後300人有余の村人口をなんとか維持している状況である。かかるミニ行政村ながら広大な村有林を有し、村内末端まで行政サービスも行き届き、他との合併問題はいまだに台頭をみせていない。かつては陸の孤島で銅山の日浦坑道(写真62)の「かご電」による交通不便な隔絶

峡谷山村であったが、1993年現在、伊予三島市海岸部から法皇トンネルを経て銅山川沿いにバスが1日3回通っている。また新居浜市への自動車ルートも大永山トンネルの完成によって開通した。

かかる対外交通路の開発や村内末端に至る道路の舗装整備(写真61)が進み、さらに豊かな自然に対する価値観が高まるなかで、当村は村おこしの一環として観光立村をめざした。その拠点として村役場のある弟地<sup>おとし</sup>にも近い筏津鉾山跡地の利用が着目され、ここに村営の「別子観光センター」が設けられた。この観光拠点は銅山川左岸の筏津坑口に隣接して設けられた筏津山荘を中心に形成された(写真63・64)。この旧坑口背後の階段状石垣斜面にはかつて鉾山住宅が分布していたが、その跡地などには高所に5棟の村営キャビンやバーベキューハウス、低位にアメゴなどの村営養魚池が設けられている。さらにモダンな公民館やプール、学校などあるnativeな保土野の集落には、国の1億円ふるさと創生資金をもとに「別子ふるさと館」が設けられ、別子銅山関係資料を中心に岩石、物産などが展示されている。このふるさと館下の銅山川の「甌穴峡」<sup>おうけつ</sup>など緑したたる溪谷美と溪流魚などは当村の自然の豊かさを象徴した。この近くには豊かな当村の森林資源を背景に、第3セクター方式による「(有)別子木材センター」が村の新しい基幹産業をめざして1986年に設けられたが、自然保護や市場の問題など課題は多い。

〈北海道夕張市と炭鉾跡地〉 閉山による過疎化に対して、鉾山跡地を積極的に観光事業などに活用し、マチの活性化を意図した代表例としては北海道の夕張市をあげることができる。夕張市の人口は1960年4月30日に最多人口116,908を記録したが、1960年当時炭鉾数20、炭鉾従業員数は16,072に上った。しかし、1960年ごろから炭鉾の閉山、縮小が続き、とくに1973年の三菱大夕張炭鉾、1982年の北炭夕張新炭鉾などの閉山は市にとって大きな打撃であった。市人口も1982年には4万を割り、1985年国調で31,665、さらに1990年国調に至っては市人口20,969と激減している。1990年の三菱南大夕張の閉山で炭鉾が市内から姿を消した。

かかる人口の激減過程の中で、とくに夕張市街地の北方高松における1977年の北炭新第二炭鉾の閉山は、ここが夕張における石炭産業の発祥地で永年北炭の本拠地であっただけに、市民に大きなショックを与えた。選炭施設の音や石炭輸送のベルトコンベアーも止まり、山腹を埋めつくした炭住の灯もつぎつぎと消えていった。ここに石炭斜陽のマチの暗いイメージから脱却するためにも、起死回生の起爆剤として、石炭を活かした一大観光開発事業計画が進められることとなった。この高松の北炭炭鉾跡地の一角には、1888年に北海道庁技師坂

市太郎によって発見され、1974年に北海道の天然記念物に指定された石炭大露頭がみられる（写真65）。またその同じ場所には1900年開坑の旧北炭第3斜坑である、旧北炭天竜坑の模擬坑が保存されていた。

かかる歴史的な場所に接して、早くも1978年には「石炭の歴史村」建設が着工された。1980年に「石炭博物館」（写真66）、「SL館」、1981年に「炭鉱（やまの）生活館」、水上レストラン「望郷」などが相次いで開館した。1983年は市政施行40周年にあたり、この6月には「石炭の歴史村」全村オープン記念式典が挙行されるに至っている。かかる「石炭の歴史村」事業の直接の推進者は、1979年に市長に就任した中田鉄治であったが、1980年には中田市長を代表者とした第3セクターによる「㈱石炭の歴史村観光」が設立され、1市7企業の出費による資本金6,000万円（1982年1億円）でスタートした。この会社の設置目的は、前述の市建設諸施設の運営管理とともに、さらに大遊園地、レジャーランドなどの建設とそれら関連施設の管理運営を行い、もって夕張市の地域振興に果たすべき役割を一層高めることにあった。

1983年には「世界の動物館」、大型遊園施設「アドベンチャーファミリー」、「グリーン劇場」などが開館し、前述の「石炭の歴史村」の全面オープンとなった（写真68）。なお1990年4月に「石炭博物館」に「採炭作動館」が併設されたが、これは坑道観光の一端をめざしたものであった。前述した1888年発見の石炭大露頭や、1900年に北炭が第3斜坑として使用した坑道の一部、後の模擬坑（天竜坑）などが「史蹟夕張礦」として保存されてきたが、「採炭作動館」は上記模擬坑を利用したもので、自走枠ドラムカッターなどが実際に動く採炭現場の様子をみごとに再現している。

前述した1977年の北炭新第二炭鉱の閉山で、その北部の山腹に炭住街を形成していた丁未、錦、小松の3地区のごときは、1980年国調では人口0で、1960年国調で丁未3,277、錦1,349、小松584の人口をみた炭住街は消滅し、今日はその痕跡を緑地化された山腹にとどめている（写真67）。最北端の旧丁未地区の山腹の一角に丁未小学校跡の碑が立つが、これには「開校明治41年11月24日 閉校昭和50年3月31日」と記されている。この碑は1983年に建立されたが、その側に1985年2月に開設された夕張市農産物加工処理センター「めろん城」のモダンな建物がみられる。ここで1986年10月に「夕張メロンブランデー」、1988年には「夕張メロンワイン」などが発売されており、付近一帯はめろん通年栽培場や、ヤマベ養殖場などを含めた「めろん城公園」をなしている。

かかる総合的な観光開発事業は、人口激減の夕張市にたしかに明るいイメージを与え、人々が集まる環境整備の方向を具体的に示すものとして注目すべき

であろう。

なお、同じ夕張市域にありながら、中心の夕張市街から約25kmも離れた旧三菱大夕張礦の跡地は、シュウパロ湖のダム嵩上げによる水没計画も伝えられ、その跡地利用は進んでいない。蛇行するシュウパロ川右岸の広い河岸段丘面を中心に、三菱の単一企業集落鹿島が国有地借区に整然と形成され、1955年当時人口は18,778をも数えた。この集落域でも、とくに常磐町、弥生町、春日町などの炭住街は1973年の閉山を契機に消滅し、その跡地の荒廃が目立つ(写真70)。しかし、急激な過疎化が進む中で、栄町、富士見町、緑町、錦町、千年町などでは人家が残存し、小中学校、市役所鹿島連絡所、夕張市鹿島生活館などもある。また千年町の産土神の三吉神社では、1992年の9月にも例大祭の各種催しが祭典実行委員会によってとりしきられ、炭鉱山神の大夕張神社が閉山で荒廃しているのとは対照的である。旧三菱社線大夕張鉄道の終点「大夕張炭山」駅(写真69)の近くに今日も三菱美唄鉄道〔美鉄バス(株)、美鉄観光(株)〕の大夕張営業所があり、1992年9月現在、夕張行、清水沢行以外に、この大夕張から札幌行の特急バス(所要時間2時間20分)が1日に3便もみられるのは注目に値する。1993年11月末現在鹿島地区には535の人口が残存するが、水没問題が解決すれば、この鹿島の集落域は姿を消すであろう。

〈長崎県高島町と炭鉱跡地〉 前述した端島(軍艦島)の属する長崎県西彼杵郡高島町では、主島の高島で1986年11月27日に高島礦業所が閉鎖し、約120年に及ぶ炭鉱島の歴史を閉じた。国調人口でピークを形成した1960年の高島町人口20,938は、閉山4年後の1990年の国調では1,256と激減している。閉山時の1986年10月1日の住民基本台帳人口は5,347を数えたが、閉山6年後の1992年のそれは1,188で、この1992年各月の住民基本台帳人口は1,100台での動きを示し、かなり落ち着いた状態を示している。かかる閉山による人口の激減は、蠣瀬立坑や二子立坑、第1斜坑、第2斜坑などの主要坑口を核に形成されていたforeignな企業空間の機能組織が崩壊したためである。しかし高島が、端島のように無人の島と化さないで1,000人有余の人口を閉山7年後も維持しているのは、企業と直接関係のないnativeな本町(本村)の集落が存在し、さらに一つの地方自治体の存亡にかかわる問題として受け止められているからである。

筆者がはじめて訪れた1965年9月当時、高島の全島面積の約80%がすでに三菱の社有地になっていたが、閉山してもかかる広大な企業所有地や社宅などが高島には残存した。光町や日吉岡、そして山手の一部などに分布していた木造炭住街は急速に撤去されたが、鉱員入坑口の蠣瀬立坑に近接して丘陵斜面社有地に分布していた緑ヶ丘、山手、蠣瀬などの鉄筋アパート群は、1993年8月踏



査当時まさに無人の廃屋風景を連ね（写真71）、1965年踏査時に比し隔世の感があった。撤去された木造炭住街の跡地の内、北東部に分布した木造平屋の日吉岡団地の炭住跡地などは放置されたままであったが、南の高島港ターミナルに近い光町地区の広大な二階建木造の炭住跡地などでは、第3セクターの㈱高島グリーンファームによるトマトのハウス栽培（敷地約30,000m<sup>2</sup>）の風景が展開している（写真72・73）。光町地区の鉄筋アパートは改良住宅として利用されているが、前述の広大な廃屋鉄筋アパート群は、撤去作業がまだ緒についたばかりでこれからの状況である。

高島港や光町地区に近接して旧三菱石炭高島砒業所の事業所地域をなしていた二子地区では、そのシンボルであった二子立坑の高い構築物（櫓）も姿を消し、旧貯炭場付近施設跡は撤去後放置されたままの状態であった（写真74・75）。わずかに旧発電所付近に㈱高島シーテックスのヒラメ養殖企業が進出している程度であった。島北部の斜面に広がる本町（本村）の集落は、南風泊漁港のある湾入に面し、カトリック教会や高島町漁業協同組合などのあるnativeな集落であった。この本町には日本初の洋式炭鉱立坑の坑口跡として知られる北溪井坑跡（写真76）があり、高島町の文化財に指定されている。このほかグラバー別邸跡、後藤象二郎邸跡、大師堂、オランダ式三角溝など、本町地区には島の文化財、史跡が集まっている。

ともあれ高島町は、水産業と観光を軸としたマリノベーション計画を推進することによって、島の地域経済の再構築をめざしている。しかし、鉄筋アパート群の廃屋を撤去し、環境の保全、整備をはかることが急務で、前述の自治体例のように炭鉱跡地を積極的に利用した、人を集める観光開発はまだ軌道に乗っていない。高知県大川村と同じように、炭鉱跡地にみるトマトのハウス栽培施設風景は注目されたが、その側の高島港ターミナルに通ずる路傍には、赤いハイビスカスの花が夏の陽光の下に美しく咲いていた。

〈新潟県新津市と産油地〉 「花とみどりと石油の里」をキャッチフレーズにしているマチに新潟県の新津市がある。いうまでもなく新津油田のマチとして、明治末から大正期にかけて全国的に一躍脚光を浴びたが、金津の旧庄屋の家に生まれた中野貫一のごときは石油王とまでいわれた。大字金津にはいまでも中野家の大邸宅があり、その中野家の寄進などで移築造営された堀出神社も鎮座する。ところで中野邸の続きに全国でも珍しい「石油の世界館」が1988年に開設された（写真77）。その付近一帯はいまでも稼働する採油施設がみられ、観光物産館などの施設の建設も進んで、いわゆる「石油の里公園」の整備が図られている。含油層の露頭がみられ、また伝統的産業遺物としても貴重な石油櫓群など

の古い採油施設がいまも稼働している風景はまことに興味深い。

#### IV. 荒廃と環境保全の問題

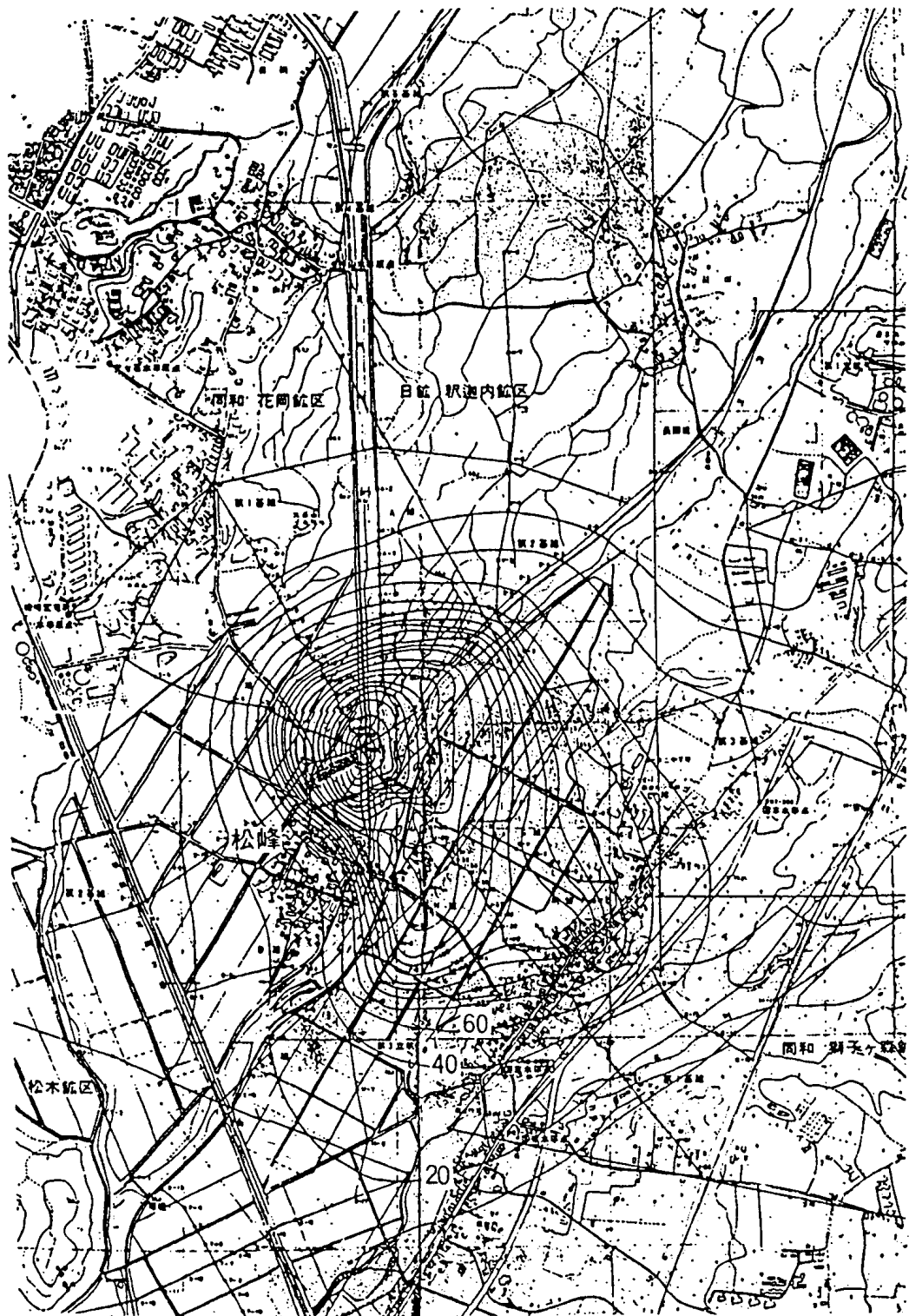
〈福岡県宮田町〉 筑豊の鞍手郡宮田町には二つの対照的な風景がみられる。それはトヨタ自動車団地と露天掘り溜水池といった、当町の「光と影」の二つの風景である。トヨタ自動車九州が、地域振興整備事業団によって造成された宮田団地に進出したのは1990年であった。この宮田団地は町北西部の有木地区に位置し、その工業用地面積は1,245,738m<sup>2</sup> (376,400坪) に及んだが、ここは炭鉱跡地ではなく主として個人持原野を工業用地に造成したものであった。このトヨタの進出は筑豊浮揚の起爆剤として脚光を浴びたが、企業側が従業員の住宅地を地元宮田町内でなく、教育面などからも北隣りの新興住宅都市宗像市に求めるに至ったことが話題を呼んだ。かかるなかで1993年8月にはじめて当町内の長井鶴にトヨタ独身社宅「パル宮田」が完成し、明るいニュースとなった。

当宮田町は1885年に貝島太助が大之浦炭礦開発に乗り出して以来、貝島炭礦会社の牙城として1976年に閉山するまで筑豊で君臨してきた。閉山後は鉱害復旧、失業対策などに町当局は追われ、文化施設や都市計画などの立ち遅れが目立っていた。かかる暗いイメージを象徴する風景に露天掘り溜水池があった。貝島炭礦のシンボルは1953年末に完成をみた高さ53mの立坑ビルであったが、これによる坑内掘りも1973年に終りをづけ、閉山までは1961年からの露天掘りで命脈を保っていた。先日も宮田東中学校文芸部『木馬』4号(1964年12月)を開いたら、1964年ごろの露天掘り風景を描いた作品に出会った。シンボルの立坑ビルは1985年に解体されて姿を消したが、露天掘り跡は「中央露天掘溜水池」や「第二西部露天掘溜水池」などとして町中央部にポツカリと大きな口をあけている(第4図、写真78)。町内各地のボタ山跡、地盤沈下跡などとともに、広大な露天掘り跡の大きな爪痕の環境保全こそ、町当局最大の課題であろう。

〈秋田県花岡鉱山地〉 大館市の花岡鉱山地でも堤沢露天掘り跡は溜水池となり、その周りを樹木がとり囲んでいる景は、広大な各地の沈澱池などとともに、当鉱山跡地の風景を特色づけている。ところで、この堂屋敷鉱床地区堤沢などの南東方に広がる水田地域の松峰集落域で、1968年地盤沈下問題が発生し、集落移転で注目された。これは同和鉱業の黒鉱鉱床「松峰」の開発によって発生したものであった(第5図、写真79)。1973年に発表された松峰地区の沈下量は、最大沈下量が336.9cm、同10cm以上の沈下面積は138.2haに及んだ。<sup>14)</sup>

かかる地盤沈下で松峰集落の集団移転問題が具体化し、もとの北西約500mの

第4図 福岡県宮田町中央部の露天掘り跡付近  
(宮田町都市計画基本図 1992)



第5図 秋田県大館北部地表沈下等高線図

(『大館市史 第3巻下』, 902ページの第159図)

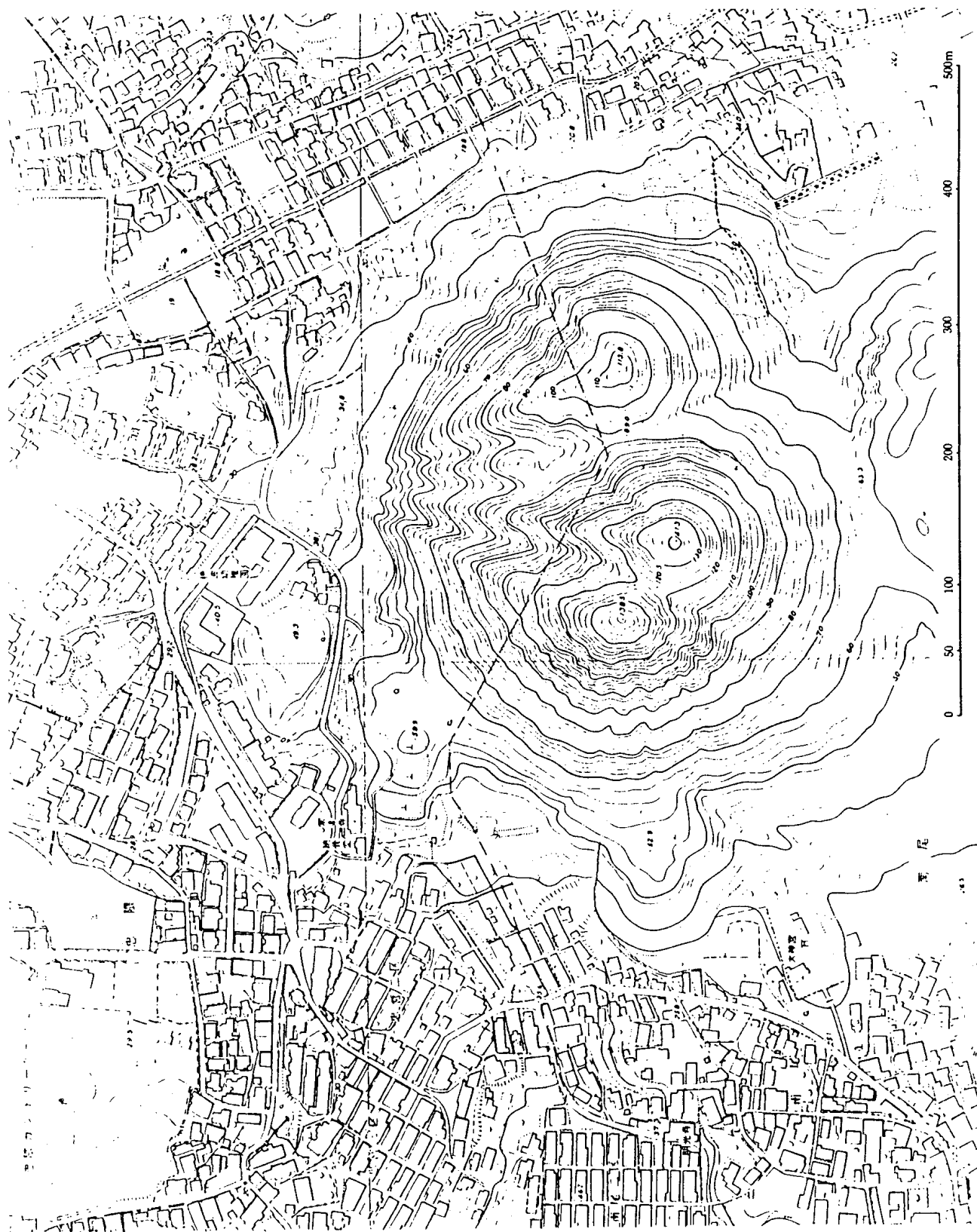
場所に85戸が1973年以降新しい集落を形成することとなった(写真80)。産土神の稲荷神社(松峰神社)も移転先の高台に移され、古くからの隣り組関係、ムラの行事も維持された。もとの松峰集落域の宅地は鉾山に売却されたが、水田は売却しないで土地改良事業で復旧する方策がとられた。筆者は1976年10月にこの松峰の新旧両集落を訪ねたが、当時旧集落は荒廃した廃村そのままの状況であった。

〈佐賀県杵島炭鉾地〉 かかる水田地域の地盤沈下問題は、九州の筑豊地方で広くみられたが、佐賀県の杵島炭鉾地でも顕著にみられた。とくに杵島炭坑五坑のあった杵島郡江北町では水田や建物の地盤沈下が目立ち、1969年の閉山後はその鉾害復旧、水田の基盤整備に明け暮れた。炭鉾地域で地盤沈下の加害者は近くのボタ山であったが、江北町西方に続く同郡大町町、北方町の杵島炭鉾地域ではボタ山はピラミッド状をなさず丘陵地山麓部に分布していた。ボタ山を崩して武雄カントリークラブのゴルフ場(写真81)が造成されている北方町で、大崎八幡社の社殿に掲げられた1865年の炭鉾絵馬(写真82)に直接接した。これは旧大崎村大副山とその山麓の炭鉾風景や、六角川の運搬船などを描いた貴重な絵馬である。<sup>15)</sup>この八幡社境内の裏側はもと明治鉾業(株)西杵鉾業所のあったところで今日は住宅地となっている。またこの大崎に鎮座する樋口神社の1908年に建てられた鳥居には、「北方炭礦主古賀善兵衛」の銘が入っており、古い炭鉾跡地の風景を垣間見る思いがした。

この北方町隣りの大町町では、長崎本線JR大町駅付近一帯に、選炭場、貯炭場など杵島鉾業所の諸施設が立地していたが、その跡地には九州精密、住特電子材料、佐賀三洋などの企業が1973年当時すでに進出していた。六角川石炭積出しの「土場」とともに、背後丘陵地山麓のボタ山の風景に炭鉾跡地の景をみるが、ボタ山の下の方炭住街跡地を分譲した住宅地にとくに関心をもった(写真83・84)。ボタ山の流出崩壊と近くの住宅地の安全の問題など、災害防止、環境保全の面から大きな課題が残る。

〈福岡県忠隈炭鉾地〉 1958年ころ筑豊地方には500を数えるボタ山が存在したが、これらのボタ山の流出崩壊が近くの河川や農地に大きな被害を与え、人家を危険にさらしてきたことはいうまでもない。ところで、福岡県三郡山地の八木山峠からの筑豊の風景を特色づけるものは、今も飯塚市郊外の旧住友忠隈鉾のボタ山(第6図、写真85～88)である。穂波町域に入るこのボタ山は、「筑豊富士」として親しまれ、文字通り筑豊のシンボルであった。

この旧忠隈鉾のボタ山も炭鉾稼働中は鋭い稜線を示したピラミッド状のボタ山本来の形態をなしていた。しかし、1965年の全面閉鎖でボタ山の膨張は止ま



第6図 福岡県穂波町旧住友忠隈鉱のボタ山付近  
(飯塚市基本図14, 1977年測量, 1987年修正)

り、やがて鋭い稜線は崩れ、その形態や地肌の色も漸次変容していった。今日は山頂に近い部分を残して、鳥糞などによってもたらされた多種の雑草木が生え茂り、北側山麓の大山祇神社跡辺もうっそうと茂っていた。道行く老人にその神社の場所を尋ねると、愛媛県大三島の勧請元に返して神社はなくなっているという。その北西方の炭鉱跡地に忠隈カントリークラブのゴルフ場が開発されていたが、今日は建売り住宅地に化していた。このように大きなボタ山に近接した住宅地は、当然ボタ山の流出崩壊の危険にさらされるも、ボタ山の自然植生などにある程度守られている状況である。筑豊の山田市には1973年踏査当時、旧三菱上山田炭鉱のボタ山風景が目立ち、「新山田音頭」にも歌われていたが、1993年訪れてみるとボタ山は姿を消し、付近一帯は住宅地など開発が進められていた。かつて上記忠隈のボタ山にアカシアなど植林するも成功せず、いまはハゼなど多い自然植生が秋の紅葉の美しさを醸しだしている。このボタ山北西方の穂波町秋松地区などでは、かつて広大な水没田が広がり、ボタ山とコントラストな風景を展開していた。<sup>16)</sup>

〈石川県尾小屋と福井県面谷<sup>おもだに</sup>〉 製錬所の煙害による山地荒廃や、河川流域の鉱毒汚染などについては、足尾をはじめ著名な事例が多い。現小松市の尾小屋鉱山地においても、日鉱経営下で閉山をみた1962年まで、日本独特の真吹炉などによる山元製錬がみられていたために極度の裸地化をみた。また梯川支流郷谷川水系で1970年ごろからカドミウム汚染などが問題となり、1971年の全山閉山後、廃山鉱害防止工事などで汚染除去が図られてきた。尾小屋鉱山跡地一帯には、山地荒廃、製錬所のシンボリック煙突、集落域各所に分布する「亀の甲カラミ煉瓦」などの風景がとくに目立った（写真89・90）。ダイナマイトによる岩盤植栽、ヘリコプターによる播種など20年間に及ぶ緑化事業で、全山にわたって緑の回復をみるまでに至った。1984年には県立としては珍しい「石川県立尾小屋鉱山資料館」がオープンし、また「尾小屋マインロード」の観光施設も1988年以降整備拡充が進められ、利用の鉱山トンネルは550m余にも及んでいる。

九頭竜川上流の福井県和泉村にある九頭竜湖には、岐阜県境から面谷川という小さな川が注いでいるが、この無人の谷間に大正末まで面谷の鉱山集落があった。近世面谷銅山については小葉田淳<sup>17)</sup>による貴重な研究があるが、明治後の1888年に三菱経営に移って以来大正初期にかけて銅山の全盛をみた。1992年に閉山したが、1920年当時、上穴馬村大字面谷<sup>かみあなま</sup>は世帯数93、人口438を数える集落規模を有していた。三菱経営下の最盛期には人口数千人の大集落を形成していたと伝えるが、1989年7月に訪れた折には、集落跡の石垣や夏草に埋もれた墓石（写真91・92）などのみみる荒廃した無人の風景が広がっていた。1961年9月の第2



次室戸台風で面谷神社も倒壊し、集落域の荒廃は進んだ。この面谷神社は1963年に大野市春日神社境内に移転建立されたが、産土神面谷神社の祭礼、維持団体ともいえる「面谷会」は、もとの面谷関係者によって形成されていた。この面谷神社の維持基本財源の問題とともに、面谷区民の共有山林120町余や墓地などをめぐって、全国に移住せる「面谷会」のメンバーには各種の問題が存続した。筆者は1977年に刊行された面谷を偲ぶ会編『郷土面谷<sup>18)</sup>』を手にして、「面谷会」のnativeな共同体的遺制が、無人の荒野と化した風景の中に根強く残存していることを知り驚かされた。同じ和泉村内にある中竜鉾山跡地が、<sup>なかたつ</sup>「アドベンチャーランド中竜」として、坑道観光で人を集めているのとまさに好対照である。

## あとがき

見聞してきた多くの鉾山跡地について羅列的に触れただけで内容の乏しい記述に終始した。宇部、大牟田ほかまだ取り上げたい事例も多かったし、また外国の場合との対比についても言及してみたかった。とくに中小鉾山の跡地についてももっと関心を向けるべきであったと思っている。また個別的研究として詳細に論述してみたいと考えた場合もあった。しかし本稿では、まえがきでもことわったように、筆者のたんなるメモとして、少しでも多くの事例を書き記しておきたいと念じた。分析も体系も乏しい本稿である上に、詳細な注記をも欠いた。なお、全国的な踏査、資料収集において、1992-93年の文部省科学研究費（一般研究C）を使用したことを付記する。現地でお世話になった市町村役場、博物館、資料館などの関係各位に対し厚くお礼を申し上げたい。

## 注

- 1) J.Brunhes (1925) : *La Géographie Humaine*. Librairie Félix Alcan, Paris, p.537.
- 2) 川崎 茂 (1973) : 『日本の鉾山集落』 大明堂, 東京, 508p.  
川崎 茂 (1992) : 『鉾山業フロンティアの諸相 — 環太平洋地域論 —』 大明堂, 東京, 284p.
- 3) すでに拙著で取り上げたことのある鉾山地も多く、現地調査をはじめ各方面から得た情報をもとに記した覚書であるので、詳細な注記は略した。市町村役場や博物館、資料館などで資料提供、教示を得た。
- 4) 例えば、島根県大田市教育委員会 (1991) : 『石見銀山遺跡発掘調査概要 4』 (『大田市埋蔵文化財調査報告12』), 島根県大田市, 21p.

- 5) 例えば、院内銀山史跡保存顕彰会(1981)：『会誌 院内銀山 明治天皇院内銀山御臨幸百年記念特集号』秋田県雄勝町。
- 6) 横川町郷土誌編纂委員会(1991)：『横川町郷土誌』 鹿児島県横川町, pp.315～356.
- 7) 成羽町教育委員会(1977)：『備中吹屋 一町並調査報告一』 岡山県成羽町, 158p.
- 8) 雑賀雄二(1986)：『雑賀雄二写真集 軍艦島 一棄てられた島の風景一』 新潮社, 東京, 131p.
- 9) 住友商事株式会社広報室(1985)：『住友の風土』 住友商事株式会社, 東京, pp.104～105. 筆者も現地を訪ねてみた。
- 10) 中津江村誌編集委員会(1989)：『中津江村誌』 大分県中津江村, pp.765～776.
- 11) 注10) 前掲書, pp.225～226.
- 12) 大川村史追録編さん委員会(1984)：『大川村史追録』 高知県大川村, pp.168～175所収「白滝鉱山跡地売買契約書」。
- 13) 横山昭市・宮久三千年編(1975)：『別子銅山と鉱業集落に関する総合研究』 愛媛大学地域社会総合研究所, 松山市, 79p.
- 14) 大館市史編さん委員会(1986)：『大館市史 第三巻下』 秋田県大館市, pp.898～907.
- 15) 北方町町史編さん事務局(1986)：『北方町史 中巻』, 佐賀県北方町, pp.244～247.
- 16) 土井仙吉：「筑豊炭田地域における鉱害の地理学的研究」 土井仙吉教授退官記念論文集刊行委員会(1985)：『漁業の立地と変動 土井仙吉地理学論文集』pp.199～228所収。
- 17) 小葉田 淳(1984)：「近世の面谷銅山について」,『福井県史研究』創刊号, pp.2～26, ほか。
- 18) 東京面谷を偲ぶ会(1977)：『郷土面谷』 面谷を偲ぶ会(岡山三栄), 川崎市, 185p.

### 〔追 記〕

1993年10月の日本地理学会秋季学術大会(立命館大学)において、次のごとき口頭発表に接した。

富岡政治(立教大・院)：鉱山観光と村おこしー観光資源としての鉱山跡ー  
また脱稿後、次のごとき論文の別刷が恵与された。

香川貴志(1993)：長崎県高島における閉山後の文化景観。京都教育大学紀要 人文科学・社会科学, 82A, pp.45～61.

道遊の割戸

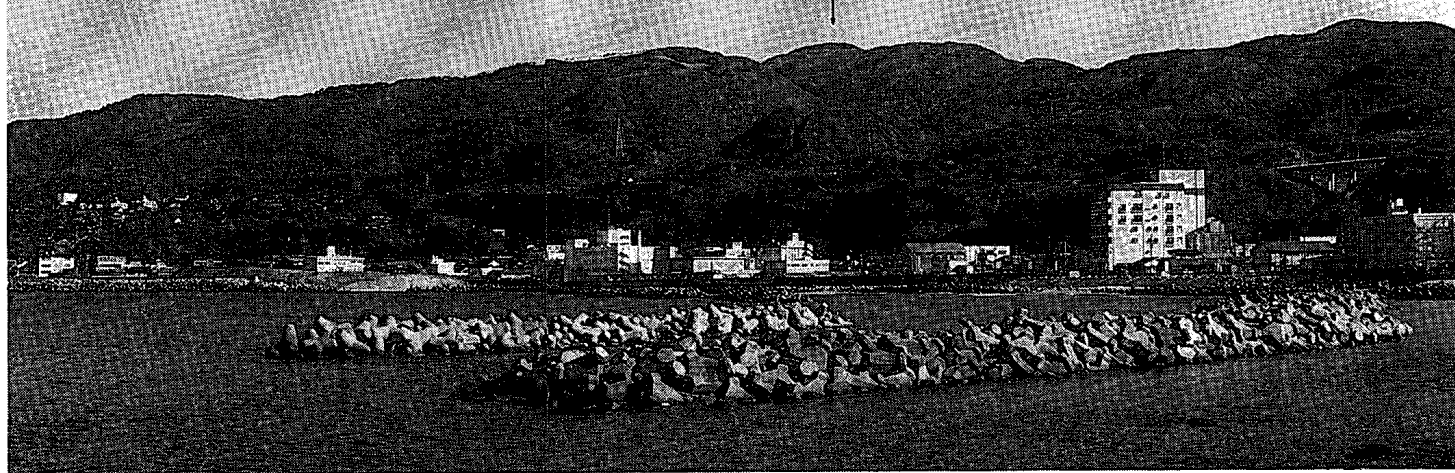


写真1. 佐渡相川の下戸海岸から町中央部、「道遊の割戸」を望む（筆者1992.10）

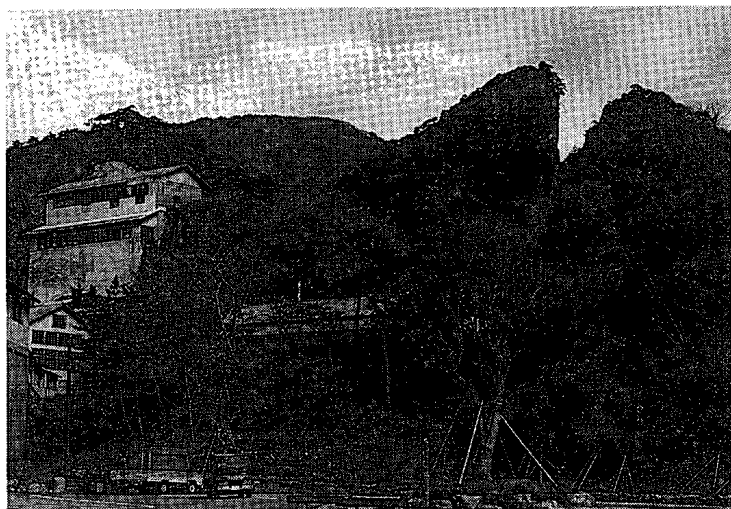


写真2. 佐渡相川の「道遊の割戸」と佐渡鉾山  
（筆者1992.11）

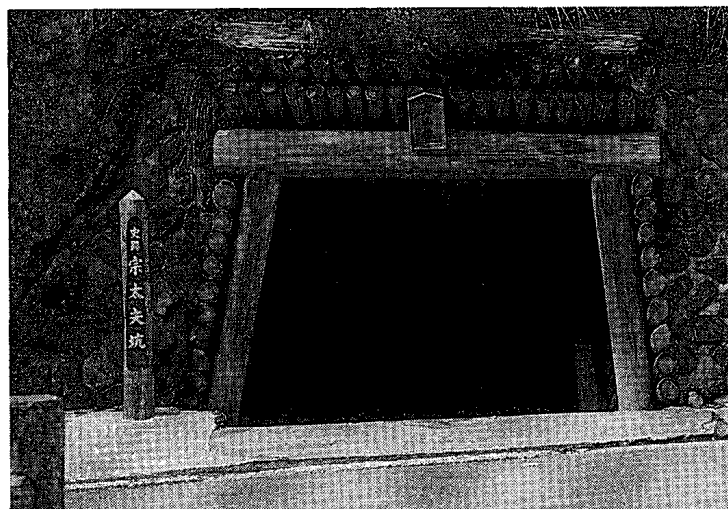


写真3. 佐渡相川の(株)ゴールデン佐渡「佐渡金山」に  
みる国史跡「宗太夫坑」（筆者1992.11）

写真4. 石見銀山の銀山川沿い  
↓ 福神山間歩  
(1816年当時は個人経営＝  
自分山の坑道)（筆者1972.10）

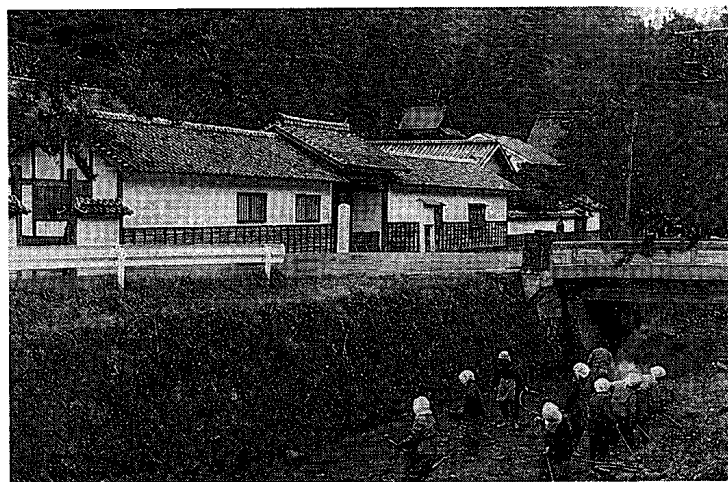


写真5.  
一 島根県大田市大森町の  
代官所跡と銀山川  
(筆者1972. 10)

写真6.

大田市大森町の旧山陰街道  
沿い町並み。左側に県史跡「石  
見銀山御料郷宿泉屋遺宅金森  
家」(筆者1991. 10)





写真7. 大田市大森町の銀山谷を望む。右に要害山，史跡山吹城々門（西本寺）（筆者1972.10）



写真8. 兵庫県生野町(株)シルバー生野「史跡生野銀山」の菊の御紋の入った門柱（筆者1993.3）

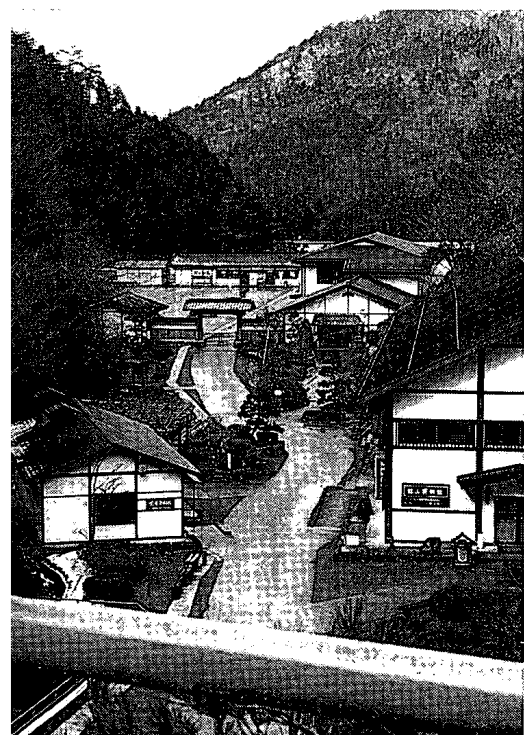


写真9. 大谷川筋金香瀬坑口付近の「史跡生野銀山」諸施設（筆者1993.3）



写真10. 「史跡生野銀山」金香瀬坑観光坑道入口。左にフランソワ・コワニエ像（筆者1993.3）



写真11. 「史跡生野銀山」金香瀬坑口上部奥地の慶寿鍾露天掘り跡（筆者1993.3）



写真12. 秋田県院内銀山の明治天皇行幸「御幸坑」付近（筆者1992.10）



写真13. 院内銀山金山神社拝殿（筆者1992.10）





写真14・院内銀山三番共葬  
墓地  
(筆者1992.10)



写真15・院内銀山金山神社境内の「御宝前」(文政  
一二年の銘)と狛犬(筆者1992.10)

写真16・鹿児島県山ヶ野金山地の集落(筆者1973.8)

写真17・静岡県土肥金山坑道入口付近  
(筆者1991.4)

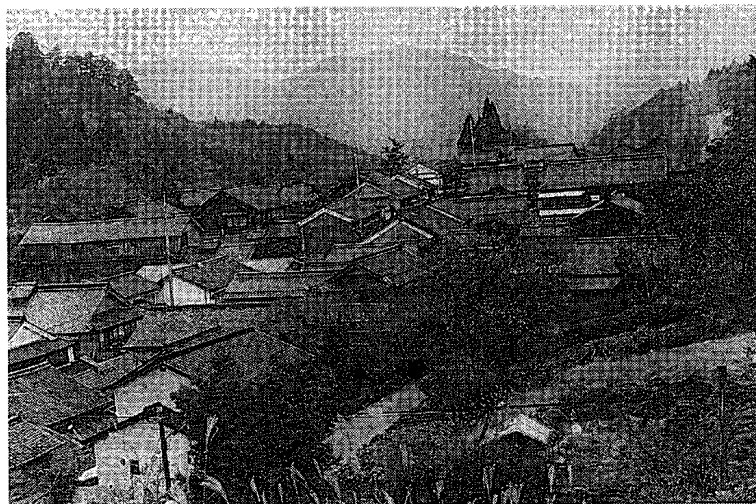
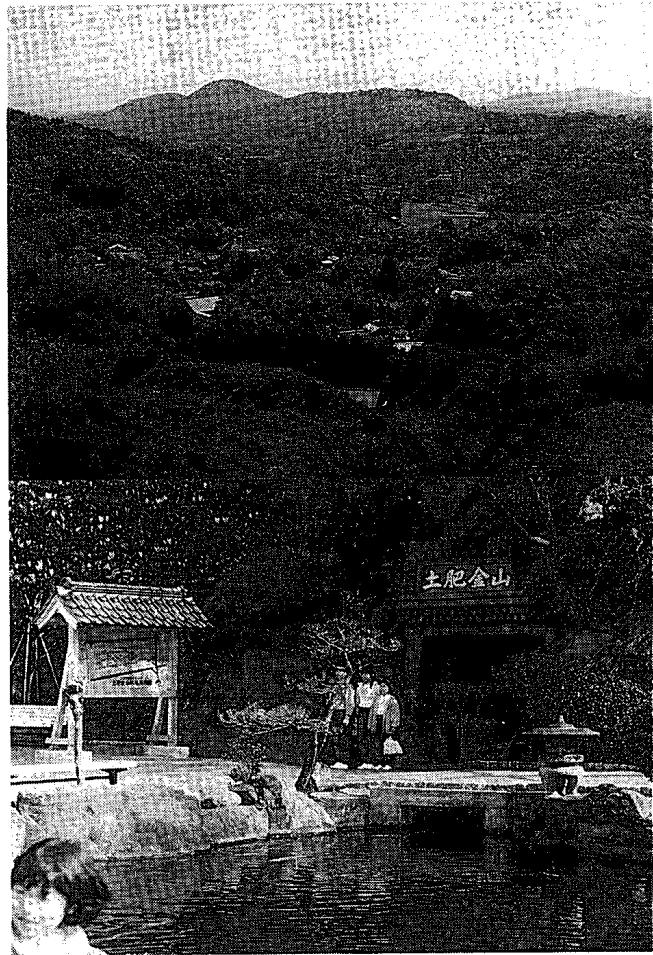


写真18・岡山県成羽町吹屋の集落.町並み先の高い森が  
山神社 (筆者1979.11)

写真20・島根県吉田村「菅谷たたら山内」・右突き当たり  
に高殿(筆者1991.10)

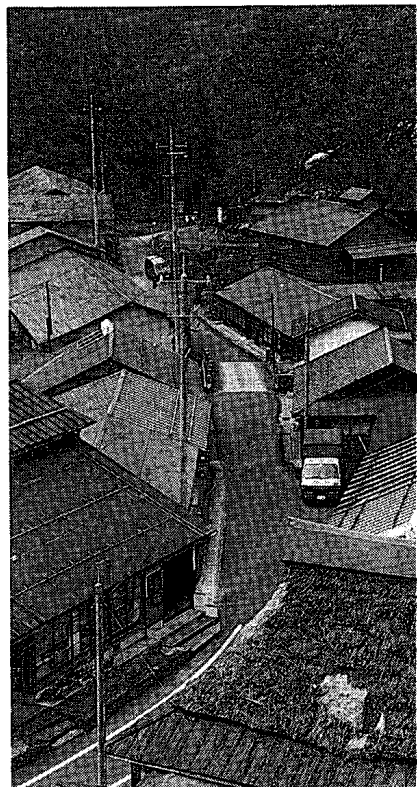
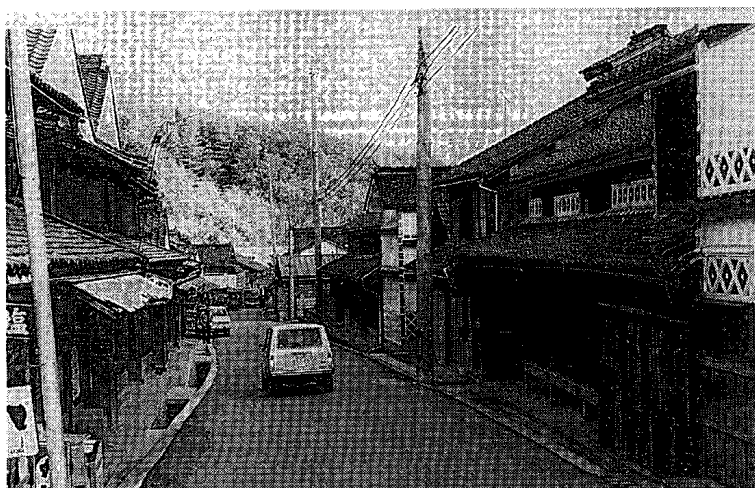


写真19・吹屋中町の町並み・右に本  
胡屋(元弁柄商)、その先に旧  
一 庄屋元弁柄商の仲田家  
(筆者1979.11)



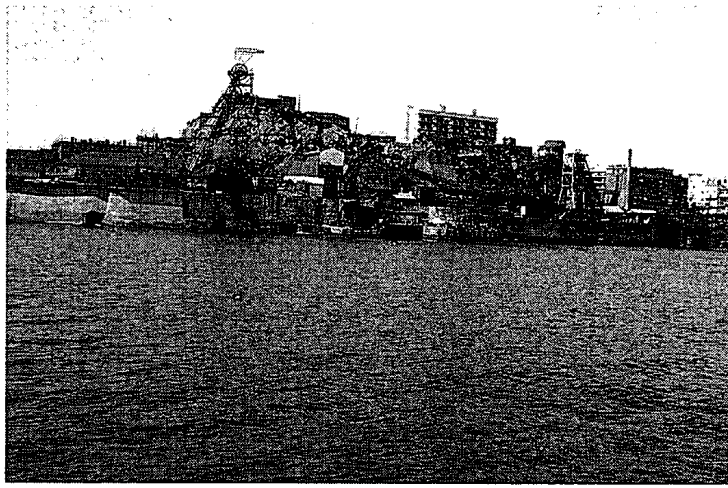


写真21. 閉山前の長崎県端島の栈橋側，第二立坑  
(筆者1965. 9)



写真22. 閉山前の端島の栈橋風景 (筆者1965. 9)



写真23. 岩手県松尾鉱山元山跡地。左方に旧緑ヶ丘鉱員  
アパート廃屋。右上方に旧松尾鉱山病院 (現学  
習院校舎) (筆者1992. 10)

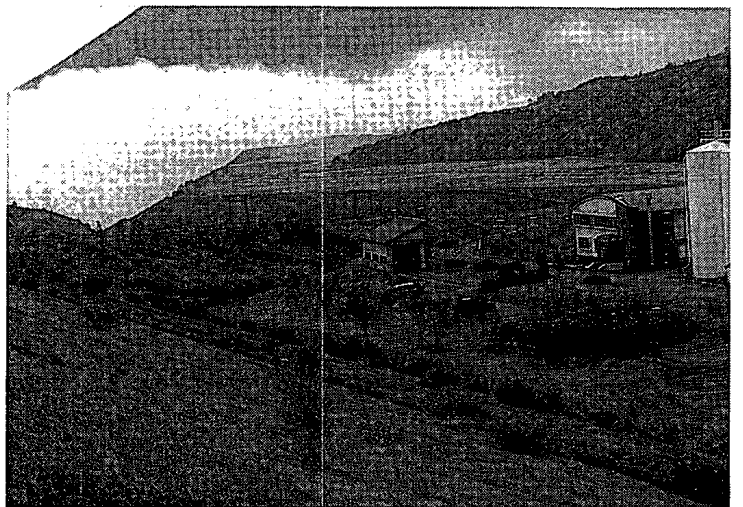


写真24. 旧松尾鉱山元山跡地と鉱水处理場，山神社。背  
後に岩手山 (筆者1992. 10)

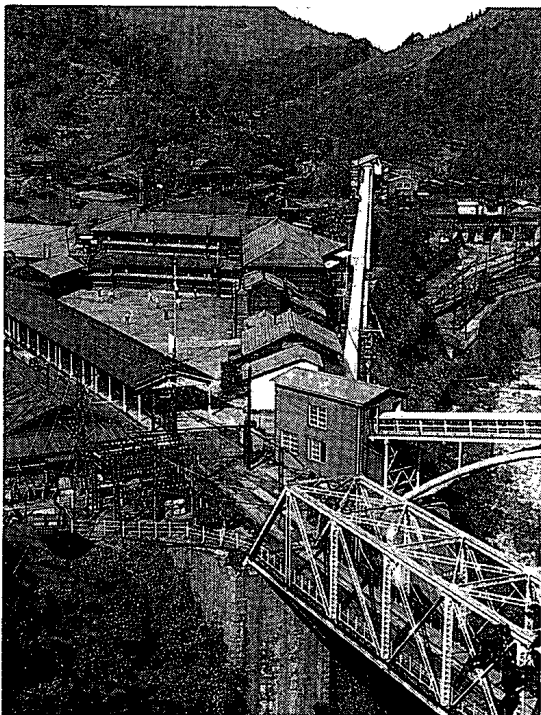


写真25. 閉山直前の愛媛県別子銅山端出場  
の第4通洞坑口付近，採鉱本部  
(筆者1972. 10)

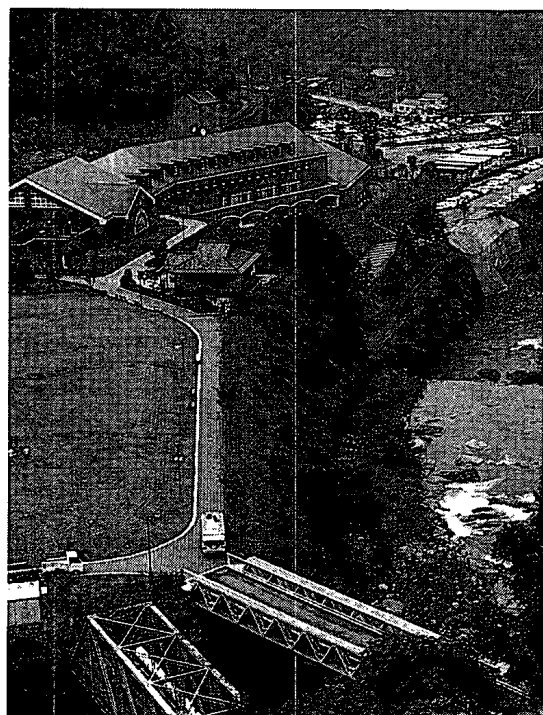


写真26. 写真25の鉱山跡地に立地したマイ  
ントピア別子の観光施設  
(筆者1993. 8)



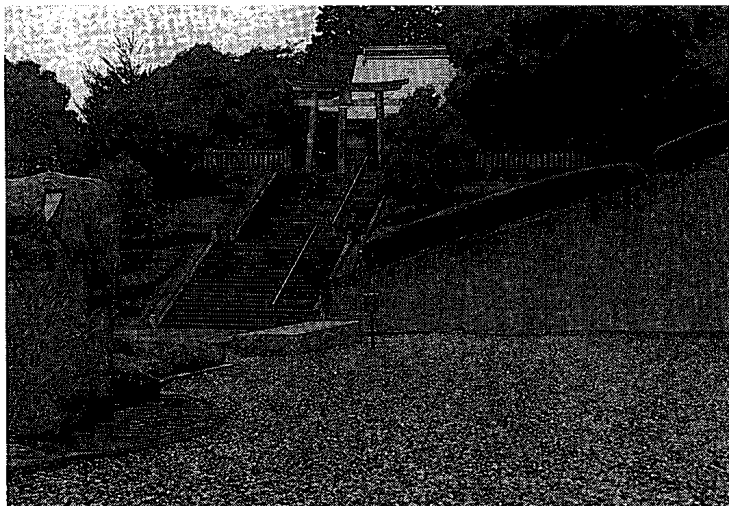


写真27. 新居浜市角野新田の大山積神社と  
別子銅山記念館（右）（筆者1993. 8）

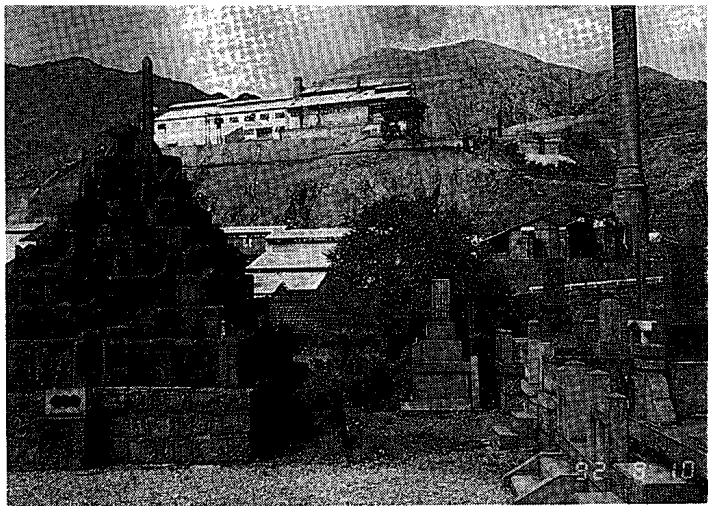


写真28. 栃木県足尾町赤倉の龍蔵寺境内「松木村無縁塚」  
と背後に製錬所煙突（筆者1992. 8）



写真29.  
一 足尾銅山小滝の集落跡記念碑  
「ここに小滝の里ありき」  
（筆者1992. 8）

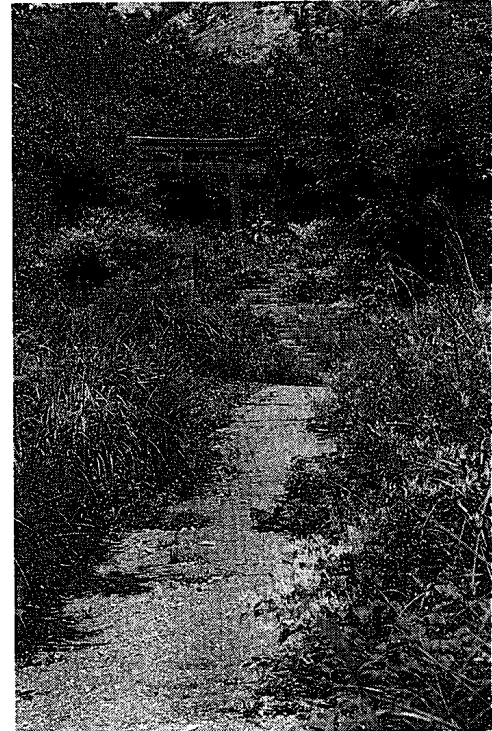


写真30. 足尾銅山, 本山山神社参道付  
（筆者1992. 8）

写真31.  
足尾銅山通洞坑口と入坑観光  
電車（筆者1992.8）

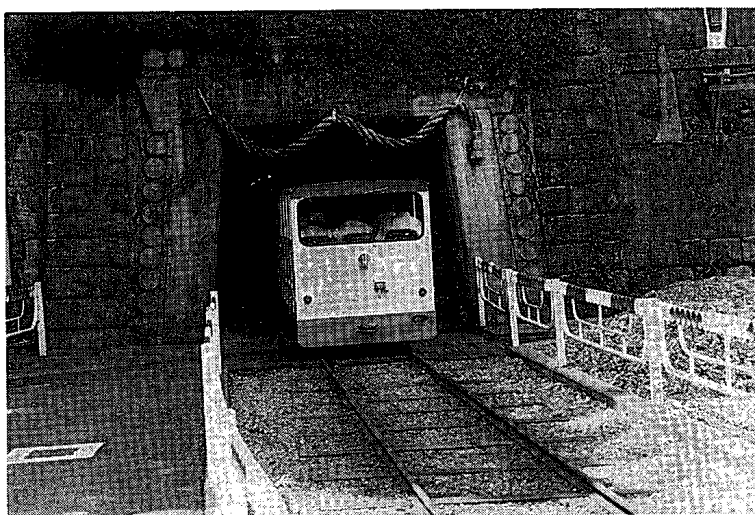
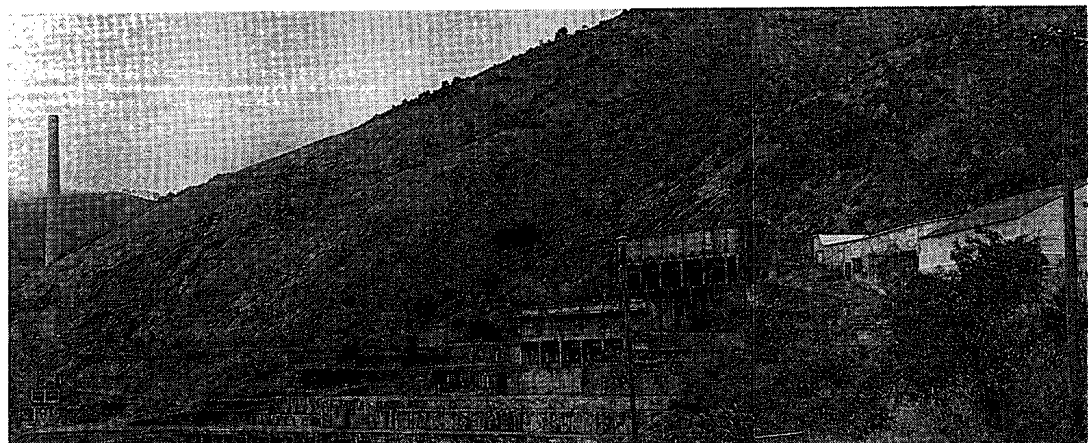


写真32.  
秋田県尾去沢鉱山選鉱  
場跡地付近・左端に製  
錬所煙突、右端に鉱山  
観光施設  
（筆者1992. 10）



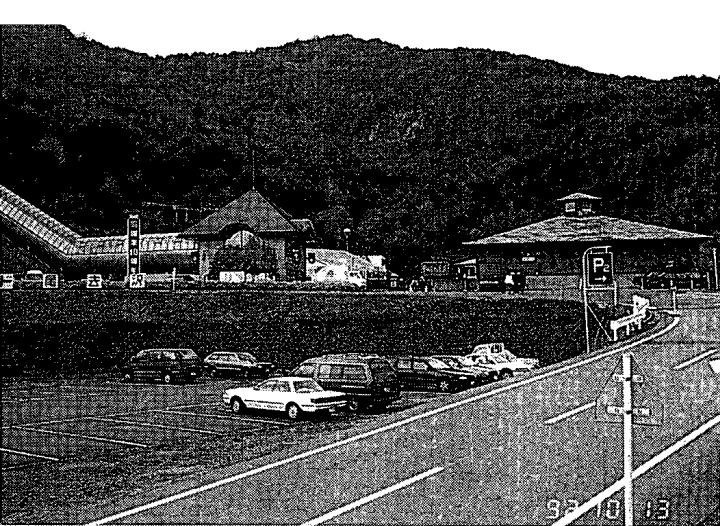


写真33. 尾去沢鉱山採鉱部跡地のマインランド観光施設（筆者1992. 10）

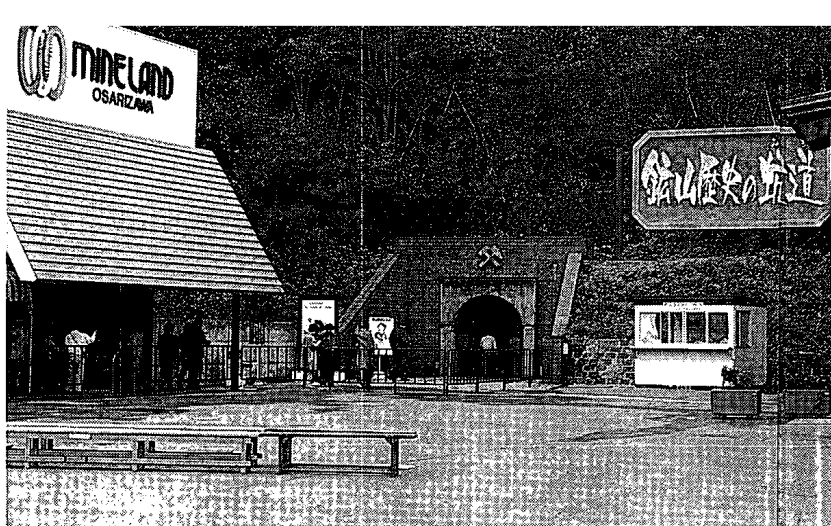


写真34. 尾去沢マインランド観光坑道入口の石切澤通洞坑付近（筆者1992. 10）

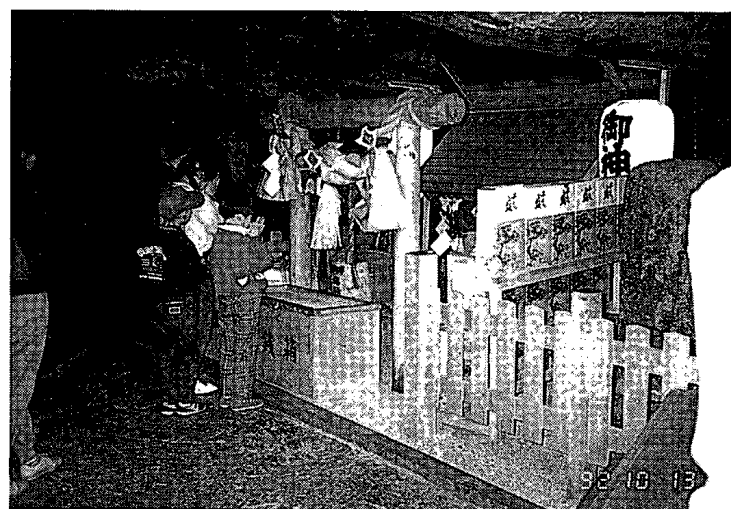


写真35. 尾去沢マインランド坑内設置の山神社（筆者1992. 10）

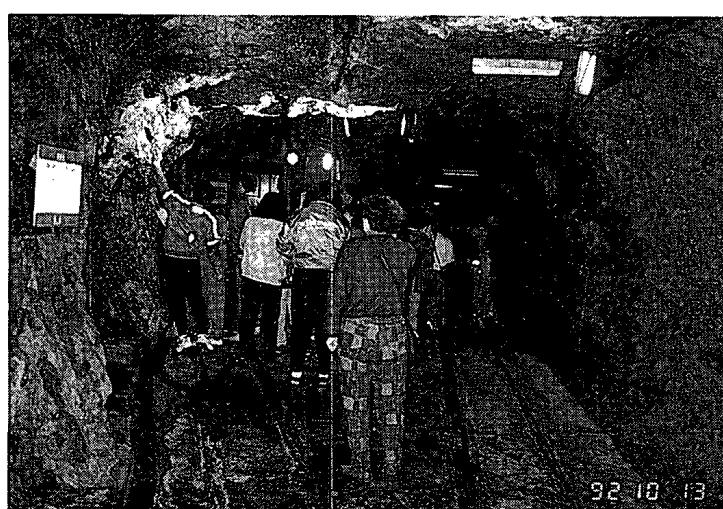


写真36. 尾去沢マインランド坑道観光風景（筆者1992. 10）

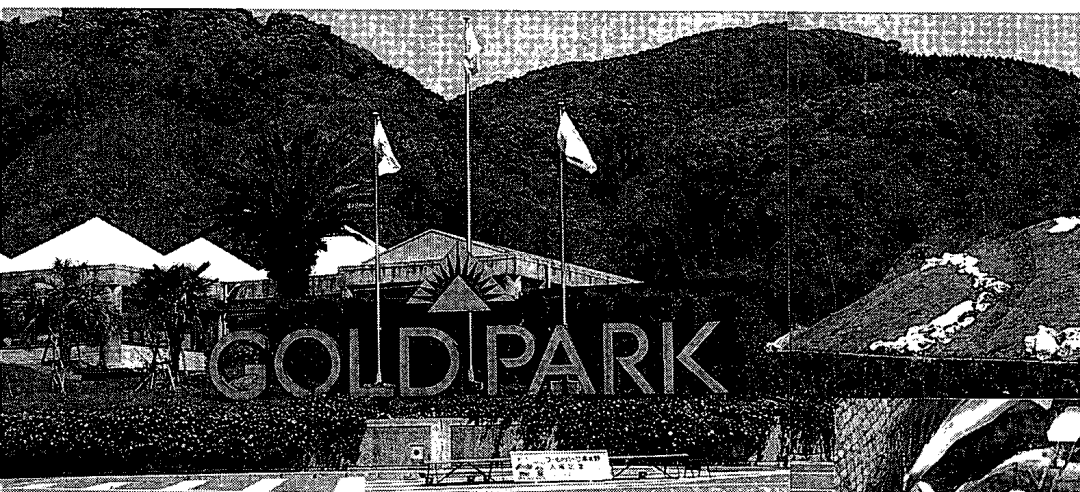


写真37. 鹿児島県串木野鉱山通洞坑口付近跡のゴールドパーク（筆者1993. 4）

写真38. 串木野鉱山観光坑道内の地底ステーション（筆者1993. 4）





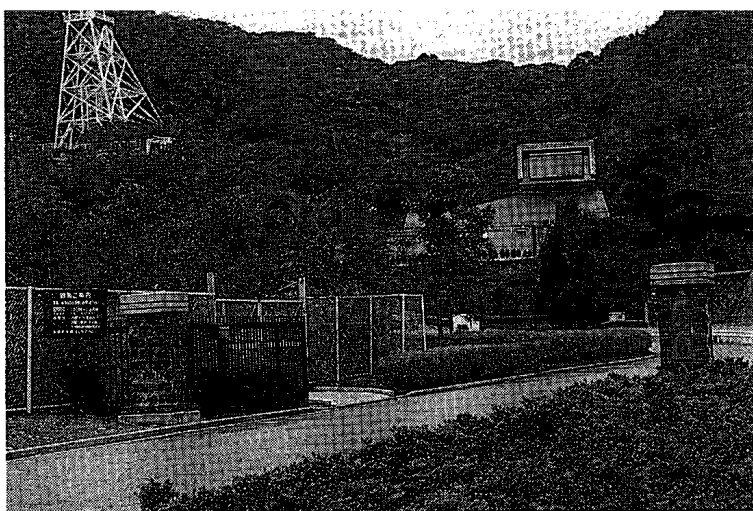


写真39. 茨城県日立鉱山本山採鉱本部跡に立地した日鉱記念館。  
左に第11立坑ケージ、右端の森に山神社（筆者1992. 8）



写真40. 日立鉱山本山跡の日鉱記念館構内にみる  
尾小屋鉱山銅製錬 釜（筆者1992. 8）



写真41.  
福岡県田川市役所屋上から  
左方に石炭記念公園（2本  
煙突、立坑、資料館）  
（筆者1993. 8）



写真44. 北海道美唄市我路ファミリー公園の「炭山の碑」  
↓  
（筆者1992. 9）

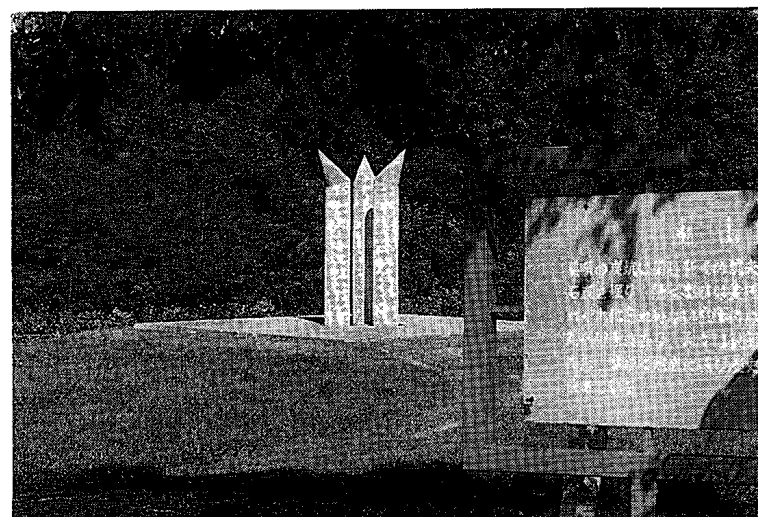


写真42.  
田川市石炭記念公園坑夫像、噴水、  
2本煙突、立坑ケイジ（筆者1993. 8）

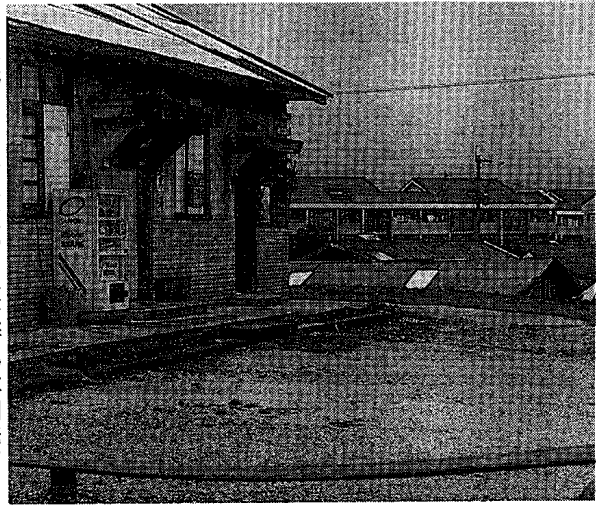


写真45. 美唄市の三菱美唄炭山の跡地。旧常盤  
↓  
台駅近くの立坑ケージ。（筆者1992. 9）

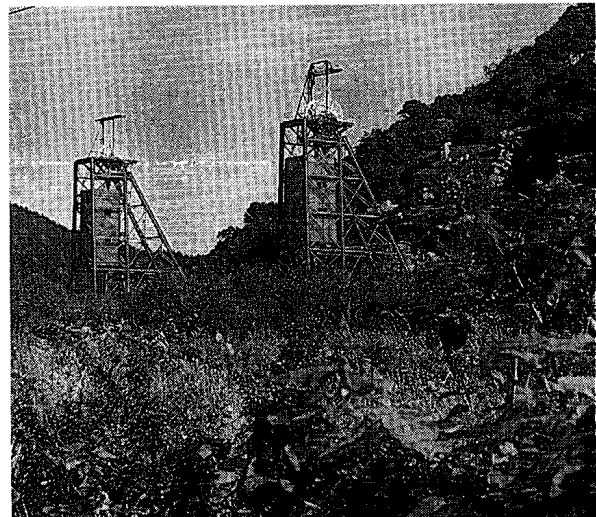




写真46. 北海道三笠市の北炭幾春別炭鉱跡地境界の「郁春別煤田の碑」と市立博物館。(筆者1992. 9)



写真47. 三笠市奔別炭硯立坑跡 (筆者1992. 9)



写真48. 福島県いわき市磐城炭鉱跡地の石炭化石館 (筆者1992.8)

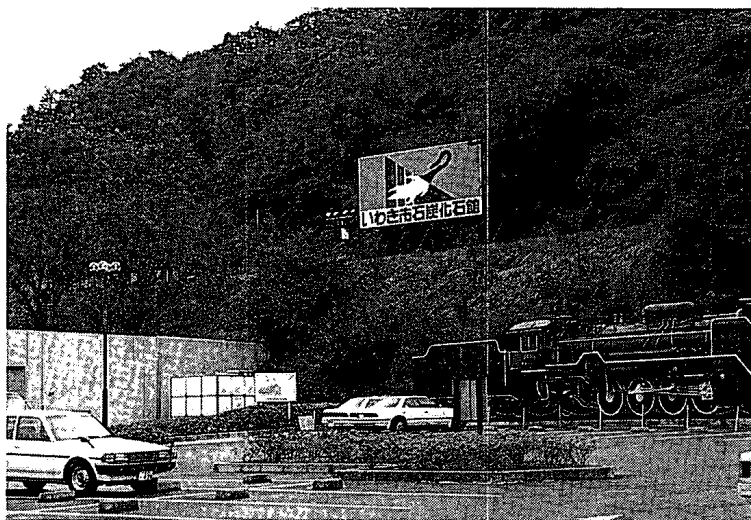


写真49. いわき市石炭化石館と背後の「昭和の杜六坑園」(筆者1992.8)



写真50.

大分県中津江村「地底博物館 鯛生金山」と背後のスギ造林地 (筆者1993. 8)

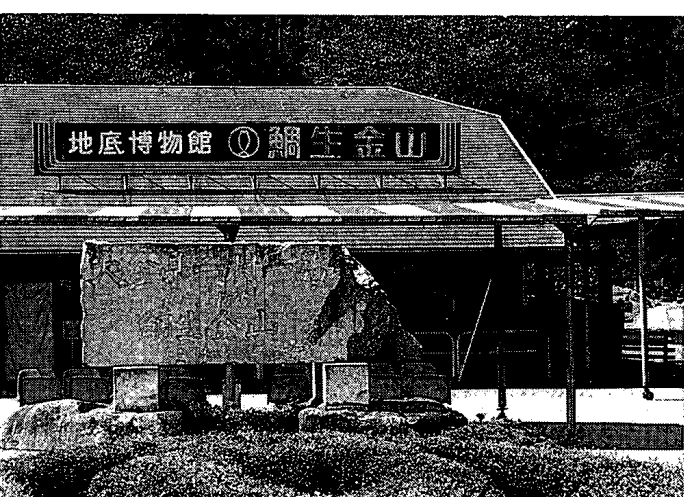


写真51. 中津江村の大分県知事「一村一品」の記念碑 (筆者1993.8)

写真52. 中津江村鯛生の「地底博物館」入坑口 (筆者1993. 8)





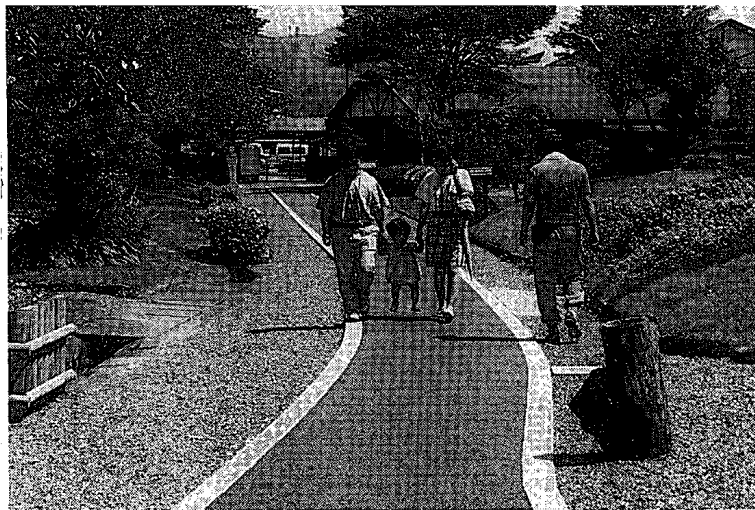


写真53.  
中津江村「地底博物館」坑  
口に向かうファミリー  
(筆者1993.8)

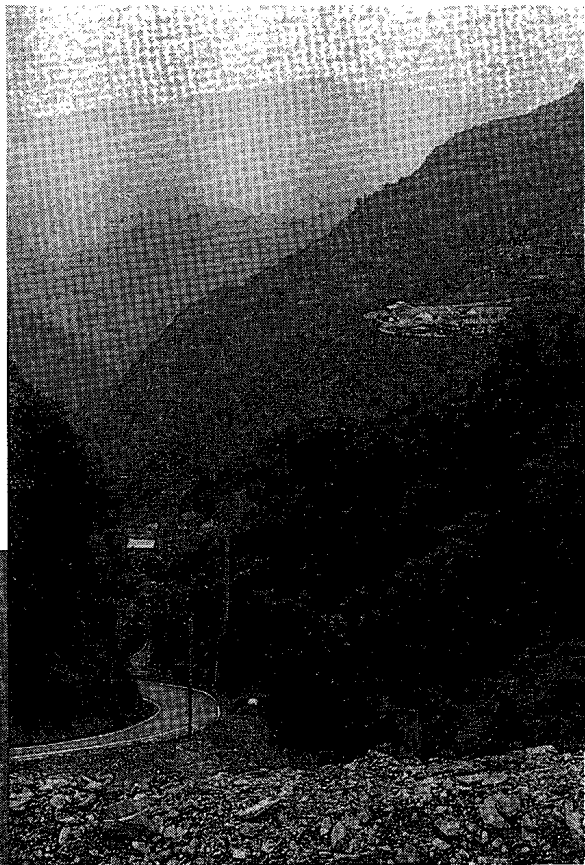


写真54. 右上方に高知県白滝鉾山跡地の「教育, 観光, レク団地」  
(筆者1993.8)

写真56. 白滝鉾山跡地の「農業団地」を  
望む (筆者1993.8)

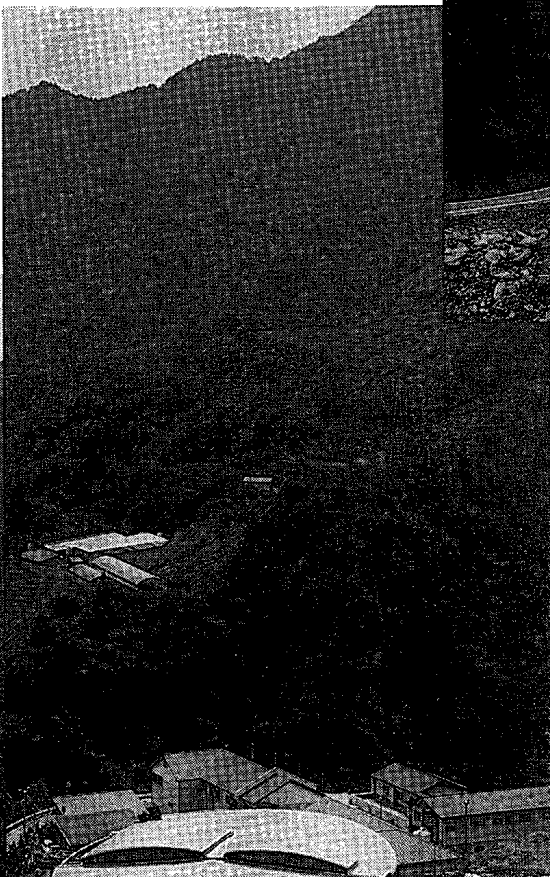


写真55. 手前に白滝鉾山跡地の「教育, 観光, レク団地」,  
対岸斜面に「畜産団地」(筆者1993.8)



写真58.  
写真56の白滝鉾山跡「農業団地」のトマトの水気耕栽培  
(筆者1993.8)

写真57.  
写真56の白滝鉾山跡「農業団地」(筆者1993.8)

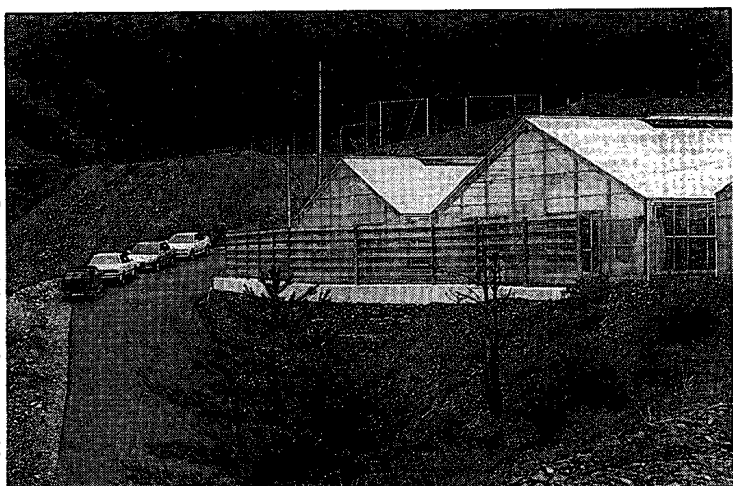




写真59. 愛媛県別子山村筏津背後山地から西方銅山川河谷、銅山越「旧別子」方面を望む  
(筆者1993. 8)

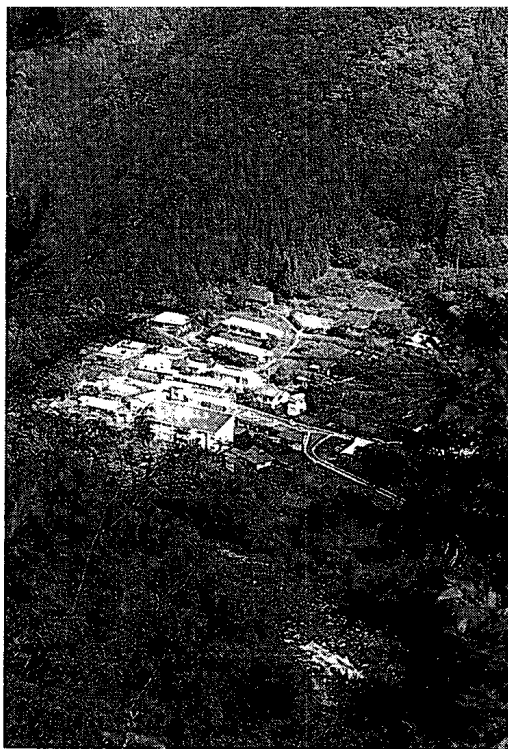


写真60. 別子山村筏津背後山地から弟地の役場集落を見下ろす  
(筆者1993. 8)

写真61・別子山村日浦から弟地に  
下る村内の道路  
↓  
(筆者1993. 8)

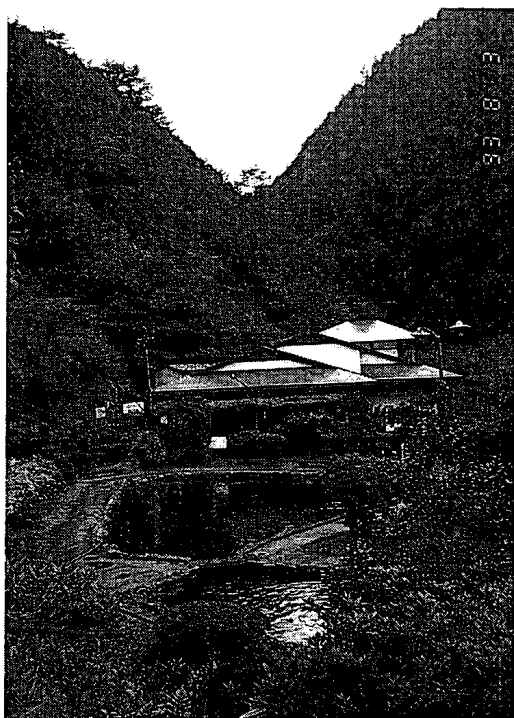
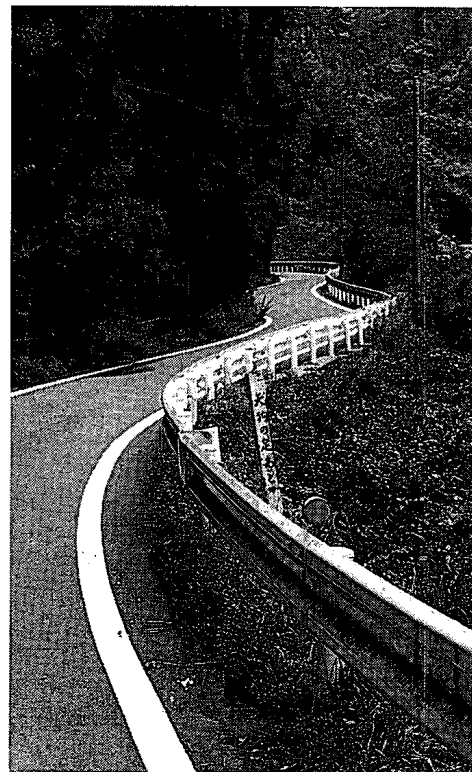


写真63. 別子山村筏津鉱山跡地の村営の山荘、  
一 養魚池 (筆者1993. 8)



写真62. 別子山村日浦の坑口跡  
(筆者1993. 8)



写真64. 別子山村筏津山荘裏の旧筏津坑口  
一 (筆者1993.8)

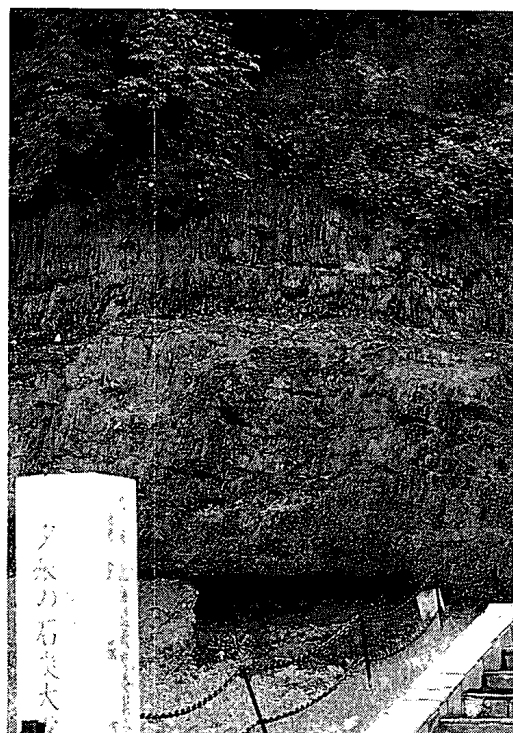


写真65. 北海道指定天然記念物「夕張の石炭大露頭」  
一 (筆者1992. 9)



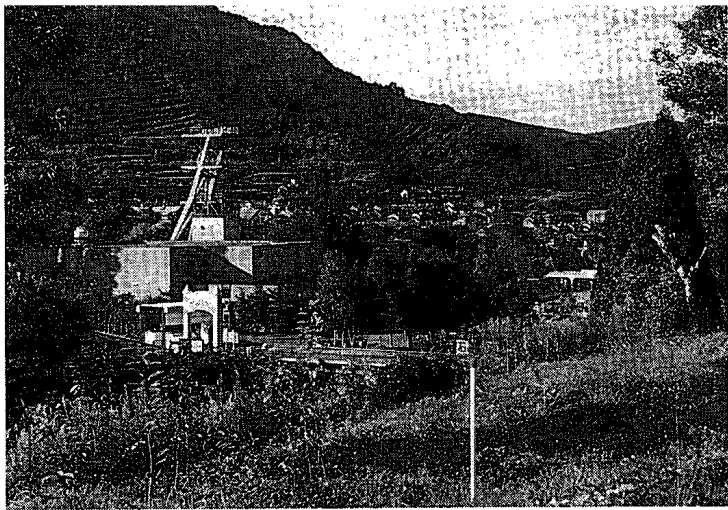


写真66. 夕張市の石炭博物館と背後山腹に高松炭住跡  
(筆者1992. 9)

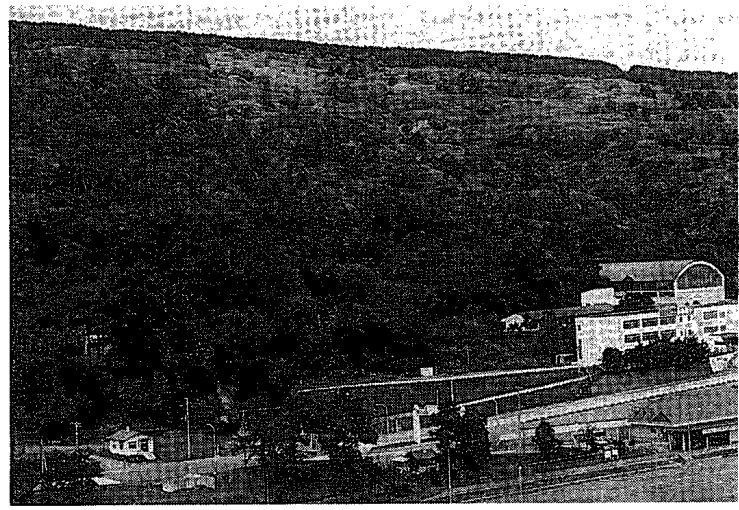


写真67. 夕張市の夕張神社背後福住炭住跡  
(筆者1992. 9)

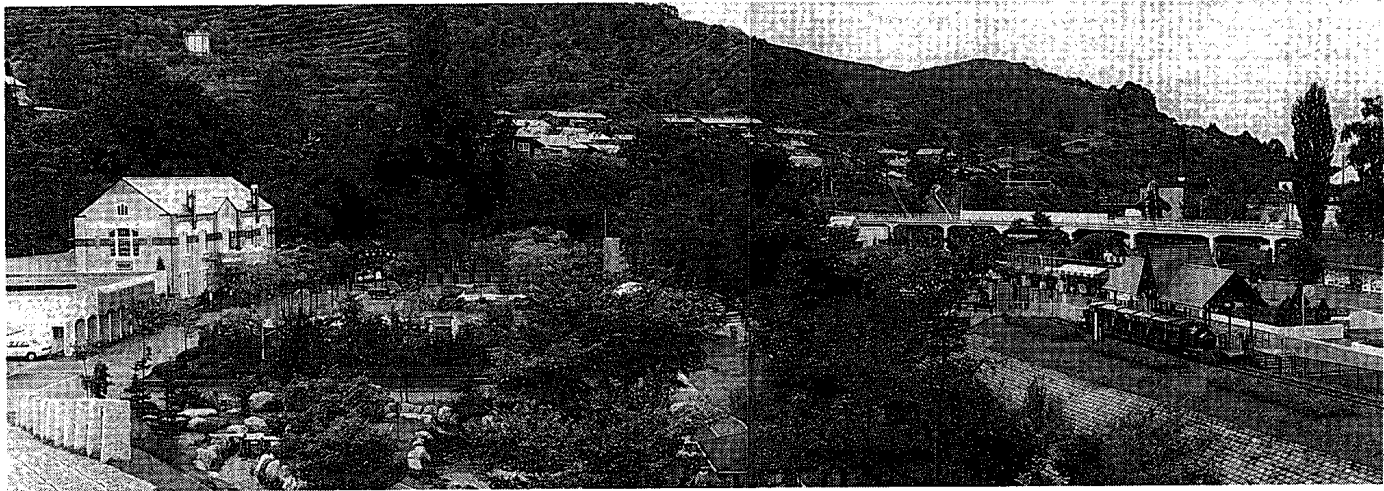


写真68. 夕張市高松, 旧北炭炭鉱跡地の「石炭の歴史村」. 左方に炭鉱生活館, 石炭の大露頭(筆者1992. 9)



写真69. 大夕張鉄道跡のサイクリングロード, 突き当たりに「大夕張炭山」駅跡(筆者1992. 9)

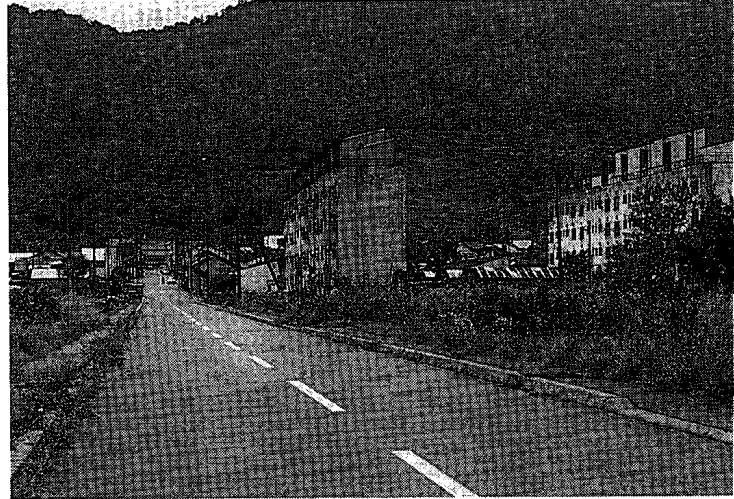


写真70. 旧大夕張炭住街の幹線道路. 突き当たりの山中腹に大夕張神社跡(筆者1992. 9)

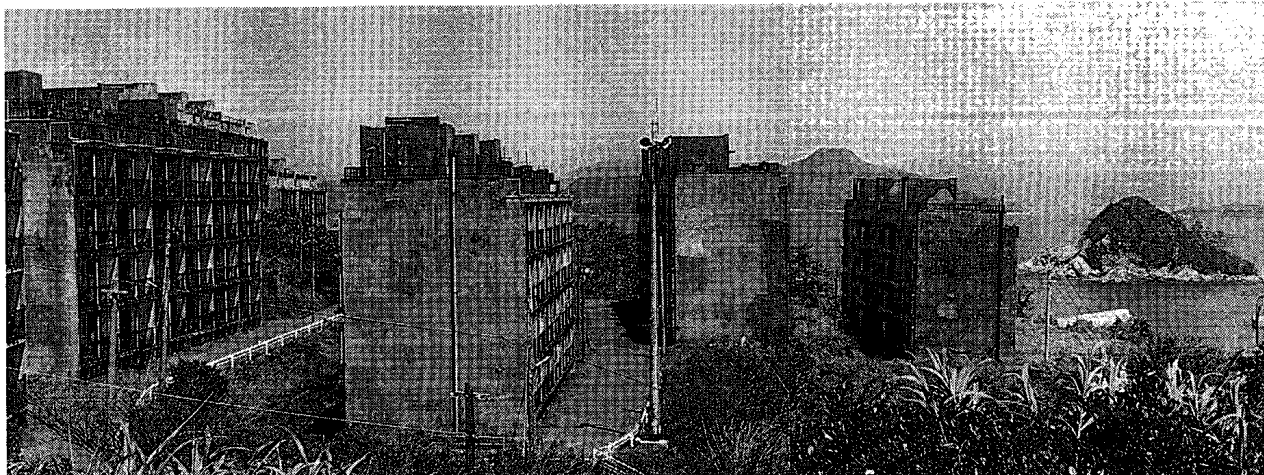


写真71. 長崎県高島の蠣瀬鉱員アパート  
ト廃屋群(筆者1993. 8)

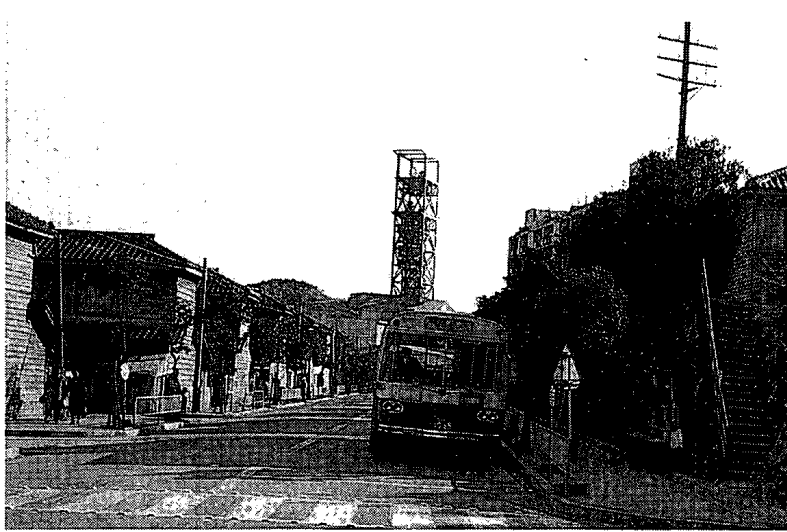


写真72. 閉山前の高島炭砒二子立坑，光町炭住街  
(筆者1974. 1)

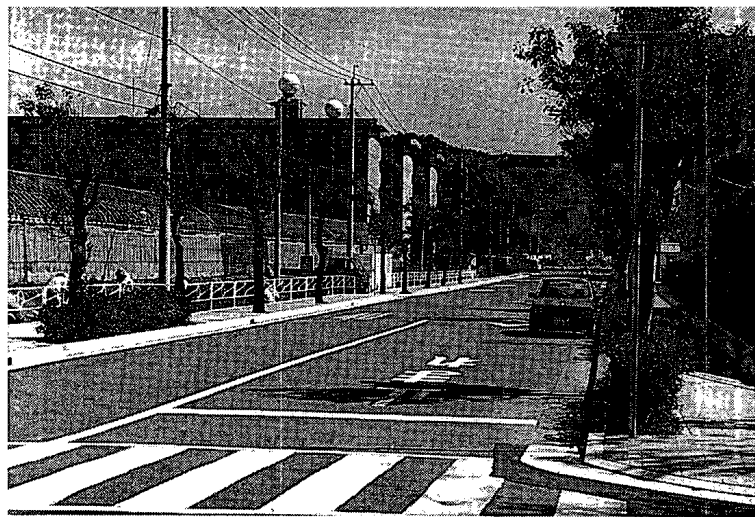


写真73. 写真72の光町炭住街跡のハウス農園。二子立坑は  
撤去 (筆者1993. 8)

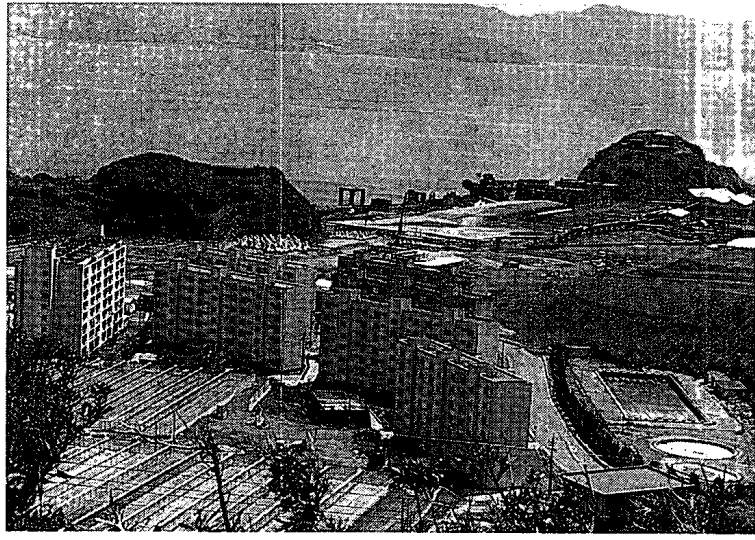


写真75. 写真74の高島町二子立坑跡付近，鉱員アパートの改良住宅。  
手前の木造炭住街跡にハウス農園造成中 (筆者1993. 8)



↑写真74. 閉山前の高島炭砒二子立  
坑付近 (筆者1974. 1)  
写真76. 高島の日本初の洋式立坑「北溪井  
— 坑跡」 (筆者1993. 8)

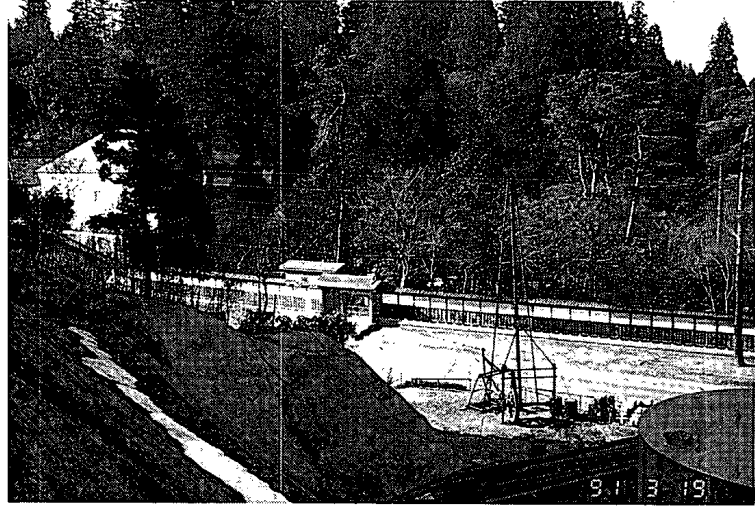


写真77. 新潟県新津市金津の中野邸，機械掘り井戸，  
「石油の世界館」 (左端) (筆者1991. 3)

写真78. 福岡県宮  
田町第二西部露天  
掘り溜水池  
(筆者1993. 10)





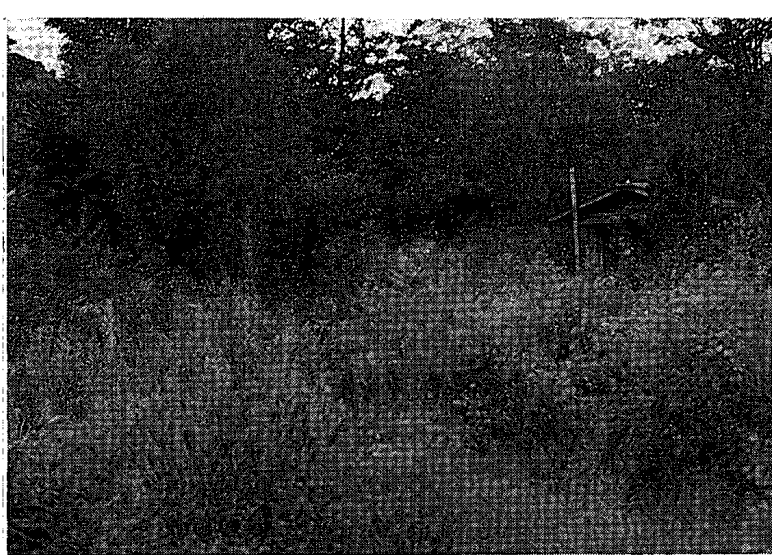


写真79. 秋田県大館市松峰の廃村（筆者1976. 10）

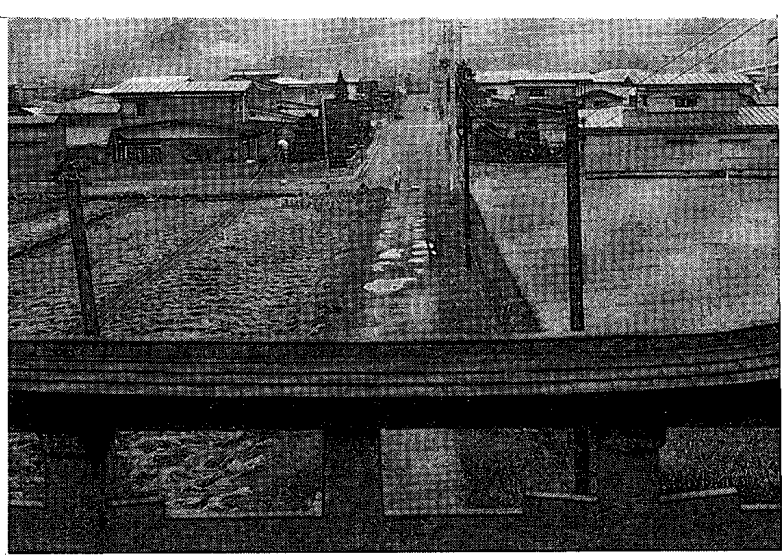


写真80. 大館市松峰の移転先の新集落（筆者1976. 10）

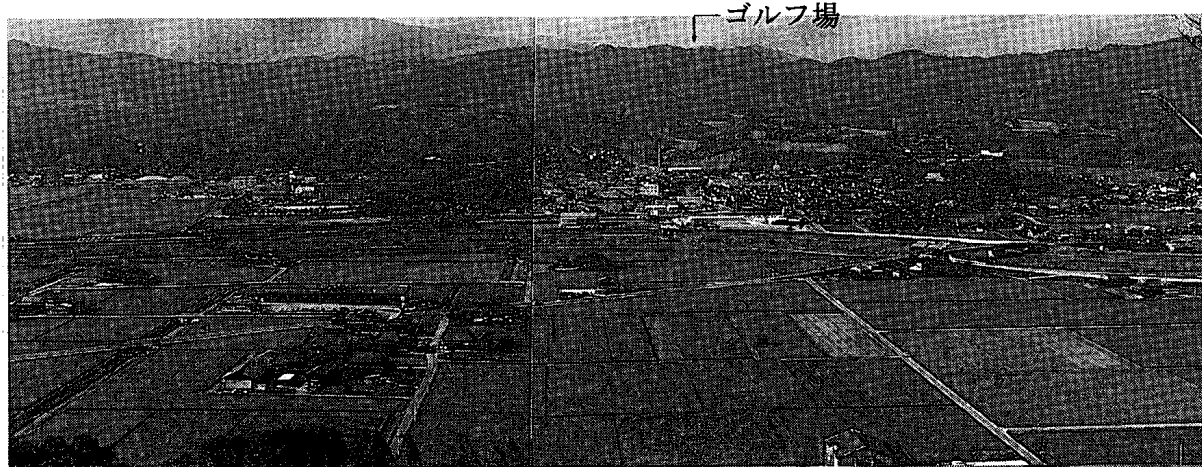


写真83. 佐賀県大町町の炭鉱ボタ山下の旧栄町炭住街。  
↓ 背後に六角川，佐賀三洋（筆者1973. 8）

写真81.  
— 佐賀県杵島山より北方町の炭鉱ボタ山跡のゴルフ場を望む（筆者1993. 8）



写真82. 佐賀県北方町大崎八幡社の炭鉱絵馬（筆者1993. 8）



写真84. 写真83のボタ山下の栄町炭住街跡の分譲住宅（筆者1993. 8）



写真85. 福岡県飯塚市の遠賀川芳雄橋より旧忠限鉱ボタ山を望む（筆者1993. 8）

写真87. 筑豊線側より1974年当時の旧  
忠隈鉾ボタ山を望む (筆者1974.7)



写真86. 飯塚近郊の穂波町旧忠隈鉾ボタ山  
(筆者1993. 8)

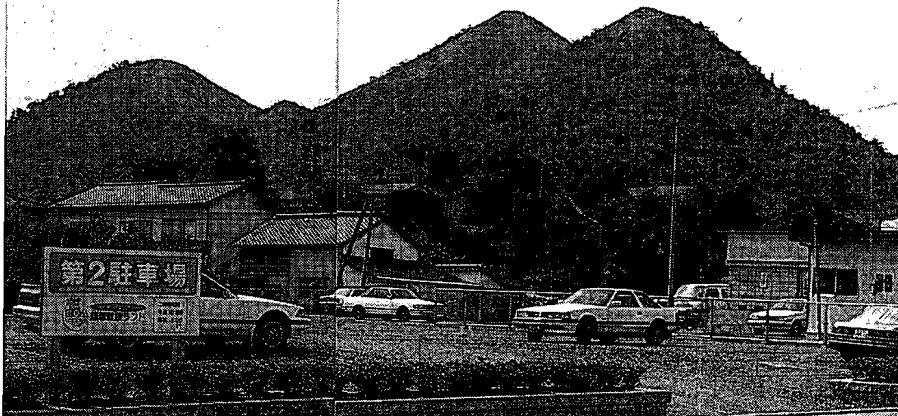


写真88・  
写真87の19年後の旧忠隈  
鉾ボタ山と住宅地  
(筆者1993.8)



写真89・  
石川県尾小屋鉾山製錬所跡付近の砂防堰堤  
(筆者1988.5)

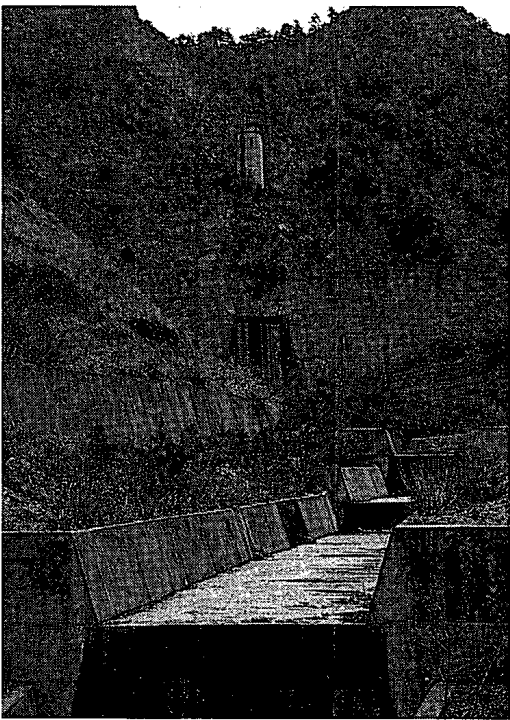


写真91・  
福井県面谷鉾山集落跡の夏草  
に隠れる墓地 (筆者1989.7)



写真92. 写真91の面谷鉾山集落跡に残る墓地 (筆者1989. 7)



写真90. 尾小屋鉾山集落跡の「亀の甲カラミ煉  
(筆者1988. 5)

